

明子谷遺跡・島田黒谷Ⅱ遺跡 島田黒谷Ⅲ遺跡・猫ノ谷遺跡

—一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI—

1994年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

明子谷遺跡・島田黒谷Ⅱ遺跡 島田黒谷Ⅲ遺跡・猫ノ谷遺跡

一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI

1994年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行なっています。

当安来道路においても、道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行なっています。

本報告書は、平成5年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成6年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 神長耕二



序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成元年度から一般国道9号（安来道路）建設予定地内遺跡の発掘調査を行なっております。この報告書は平成5年度に実施した明了谷遺跡（安来市島田町）、島田黒谷Ⅱ遺跡（安来市島田町）、島田黒谷Ⅲ遺跡（安来市島田町）、猫ノ谷遺跡（安来市井田町）の調査結果をとりまとめたものであります。

安来道路の建設が進められています安来平野一帯は、古代から文化が栄えた地域であります多くの遺跡が確認されております。今回調査を実施しました明了谷遺跡からは、安来市では珍しい繩文上器を含む遺物が出土しました。島田黒谷Ⅲ遺跡からは、弥生時代の墳墓群が発見されました。また、猫ノ谷遺跡からは弥生時代後期後半から古墳時代初頭のものと考えられる住居跡が見つかりました。これらは当時の生活や墓制を知るうえで貴重な資料となることと思われます。

本報告書が多少なりとも安来平野周辺の歴史を解明する契機となり、また広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるうえで役立てば幸いです。

本書を刊行するにあたり、調査にご協力いただきました建設省中国建設局松江国道工事事務所をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

島根県教育委員会

教育長 今岡義治



例 言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が1993年度（平成5年度）に実施した、一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
 2. 本書で扱う遺跡は次の通りである。

明了谷遺跡、島田里谷八遺跡、島田里谷三遺跡（安來市島田町）

猪ノ谷遺跡 (安来市墨井田町)

3. 調査組織は次の通りである。

調查主體：烏拉特教育委員會

事務局 文化課 幸澤卓嗣(課長)、山根成二(同課長補佐)、中島哲(同文化係長) 伊藤宏(同主事) 埋蔵文化財調査センター 勝部昭(センター長)、久家儀夫(同課長補佐)、工藤直樹(同企画調整係主事)、田部利夫(島根県教育文化財団嘱託)

調査員：ト部吉博（埋蔵文化財調査センター主幹）、大庭俊次（同主事）、池淵俊一（同主事）、

福島 遼(回教論兼主事)、平塚 修(回講師兼主事)、金山尚吉(安来市教育委員会主事補)

調査指導 山本 清（島根県文化財保護審議会公長）、徳岡隆大（島根大学汽水域研究センター所長）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、大西郁夫（島根大学理学部教授）、竹広文明（島根大学汽水域研究センター助手〈考古学〉）

遺物整理 加藤往子、門脇卓子、来海順子、桑谷美代恵、佐々木孝子、陶山佳代、高橋啓子、多久和文子、野中洋子、長谷川弘子、大島律江、増田弘子、金坂忠美子

4. 発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会島根支部 布村幹夫（現場事務所長）、中村弘巳（技術員）、原 博明（技術員）、福澤幸子（事務員）、与倉明子（同）

発振作業員各位

5. 千葉 豊(京都大学埋蔵文化財調査センター助手)、平井 勝(岡山県古代吉備文化財センター係長)の両氏には報告書作成にあたって有益な助言をいただいた。

6. 描図中の方位は、因十調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。

7. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

8. 本書で使用した遺構記号は次の通りである。

P…ピット SB…掘立柱建物跡 SD…溝状造構 SI…竪穴住居跡 SK…上墳 SX…その他の造構

9. 採図の縮尺は図中に明示した。
10. 本書の編集執筆については調査員が協議分担してこれを行った。なお、それぞれの分担については目次に明示した。
11. 所載遺跡の出土遺物及び実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

第 1 章	調査に至る経緯	(ト部吉博)	1
第 2 章	位置と環境	(ト部吉博)	2
第 3 章	明子谷遺跡	(池淵俊一)	7
第 1 節	調査の概要		7
第 2 節	検出した遺構・遺物		8
第 3 節	小結		1 7
第 4 章	島田黒谷Ⅱ遺跡	(福島 浩)	1 8
第 1 節	調査の概要		1 8
第 2 節	調査の結果		1 8
第 3 節	小結		1 9
第 5 章	島田黒谷Ⅲ遺跡		2 0
第 1 節	調査の概要と経過	(池淵俊一)	2 0
第 2 節	検出した遺構・遺物		2 0
(1)	島田黒谷「1号墳」の調査	(池淵俊一)	2 0
(2)	I 区の調査	(池淵俊一)	2 3
(3)	II 区の調査	(池淵俊一)	2 5
(4)	III 区の調査	(福島 浩)	3 2
(5)	島田黒谷「2号墳」の調査	(池淵俊一)	3 7
(6)	IV 区の調査	(池淵俊一)	3 7
(7)	V 区の調査	(池淵俊一)	4 2
第 3 節	小結	(池淵俊一)	5 1
第 6 章	猫ノ谷遺跡	(大庭俊次)	5 3
第 1 節	調査の概要		5 3
第 2 節	検出した遺構・遺物		5 4

図版

- | | | |
|-------------|-------|----------|
| 明子谷遺跡 | | 図版 1～2 |
| 島田黒谷Ⅱ遺跡 | | 図版 3 |
| 島田黒谷Ⅲ遺跡 | | 図版 3～14 |
| 猪ノ谷遺跡 | | 図版 15 |
| | | |
| 明子谷遺跡出土遺物 | | 図版 16～18 |
| 島田黒谷Ⅱ遺跡出土遺物 | | 図版 19 |
| 島田黒谷Ⅲ遺跡出土遺物 | | 図版 19～22 |
| 猪ノ谷遺跡出土遺物 | | 図版 22～23 |

挿 図 目 次

大測図版

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 1 周辺の遺跡位置図 | 29 III区 遺構配置図 |
| 2 明子谷遺跡調査区配置図 | 30 III区 土層図 |
| 3 明子谷遺跡 遺構配置図・遺物分布状況図 | 31 III区 SD 0 1 実測図 |
| 4 明子谷遺跡調査区東・南壁土層図 | 32 III区 SK 0 1・0 2・0 3 大測図 |
| 5 明了谷遺跡 SD 0 1 実測図 | 33 III区 出土上器 |
| 6 明子谷遺跡出土 織文土器 | 34 IV・V区調査区およびレンチ配置図 |
| 7 明子谷遺跡出土 弥生土器・古式土師器(1) | 35 島田黒谷「2号墳」レンチ配置図 |
| 8 明子谷遺跡出土 弥生土器・古式土師器(2) | 36 島田黒谷「2号墳」上層図 |
| 9 明了谷遺跡出土 土師器 須恵器 | 37 IV区 地形測量図・遺物出土状況図 |
| 10 明子谷遺跡出土 石器 土錐 | 38 IV区 土層図 |
| 11 島田黒谷Ⅱ遺跡試掘レンチ配置図 | 39 IV区 P 1 実測図 |
| 12 T 6, T 15, T 24 土層図 | 40 IV区 出土須恵器 |
| 13 島田黒谷Ⅲ遺跡出土土器 | 41 V区 調査前測量図 |
| 14 島田黒谷Ⅲ遺跡調査区配置図 | 42 V区 土層図 |
| 15 島田黒谷Ⅲ遺跡 I・II区調査区配置図 | 43 V区 遺構配置図 |
| 16 島田黒谷「1号墳」地形測量図 | 44 V区 SK 0 1 実測図 |
| 17 I区 調査後地形測量図 | 45 V区 SK 0 1 標石 |
| 18 I区 北壁土層図 | 46 V区 SK 0 1 供獻土器群出土状況図 |
| 19 I区 出土上器 | 47 V区 SK 0 1 出土上器 |
| 20 II区 上層図 | 48 V区 SK 0 2 実測図 |
| 21 II区 地形測量図 | 49 V区 SK 0 3 実測図 |
| 22 II区 SX 0 1 実測図 | 50 V区 SK 0 4 大測図 |
| 23 II区 SK 0 1 実測図 | 51 V区 SK 0 4 出土管玉 |
| 24 II区 SK 0 2 大測図 | 52 猫ノ谷遺跡遺構位置図 |
| 25 II区 尾根上ピット群実測図 | 53 猫ノ谷遺跡壁穴住居跡実測図 |
| 26 II区 SX 0 2 実測図 | 54 猫ノ谷遺跡出土遺物 |
| 27 II区 出土弥生土器・須恵器 | |
| 28 III区 調査前地形測量図 | |

図 版 目 次

- 図版1 空から見た明子谷遺跡 明子谷遺跡東・南壁セクション 明子谷遺跡中央ベルトセクション
- 図版2 明子谷遺跡SD01 明子谷遺跡縄文土器出土状況 明子谷遺跡調査終了時全景
- 図版3 島田黒谷II遺跡調査風景 島田黒谷III遺跡I・II・III区全景 島田黒谷III遺跡IV・V区全景
- 図版4 島田黒谷III遺跡I区完掘状況 II区SX01完掘状況 II区SK01完掘状況
- 図版5 島田黒谷III遺跡II区尾根上ピット群完掘状況 II区尾根上SX02積石露山状況
II区完掘状況
- 図版6 島田黒谷III遺跡III区SK01完掘時 同セクション III区SK03完掘時
- 図版7 島田黒谷III遺跡III区SD01 III区中央ベルトセクション III区全景
- 図版8 島田黒谷III遺跡IV・V区調査前 IV区全景 IV区東壁セクション
- 図版9 島田黒谷III遺跡IV区東西セクション IV区P1 IV区須恵器出土状況
- 図版10 島田黒谷III遺跡V区埴輪群プラン検出時 同完掘時 SK01供獻土器検出時
- 図版11 島田黒谷III遺跡VI区SK01縦断セクション 同横断セクション V区SK01完掘時
- 図版12 島田黒谷III遺跡V区SK02検出時 同完掘時 同セクション
- 図版13 島田黒谷III遺跡V区SK03 同セクション VI区SK04
- 図版14 島田黒谷III遺跡V区SK04横断セクション 同管玉出土状況 IV・V区遠景
- 図版15 猫ノ谷遺跡調査区遠景 堅穴式住居跡
- 図版16 明子谷遺跡 縄文土器(外面) 同(内面)
- 図版17 明子谷遺跡 弥生土器・古式土師器(1) 同(2)
- 図版18 明子谷遺跡 弥生土器・古式土師器(3) 須恵器・土師器・土鍤・石器
- 図版19 島田黒谷II遺跡出土遺物 島田黒谷III遺跡I区出土遺物
- 図版20 島田黒谷III遺跡II区出土遺物 同III区出土遺物
- 図版21 島田黒谷III遺跡VI区SK01出土弥生土器 同IV区出土須恵器
- 図版22 島田黒谷III遺跡IV区出土須恵器疊(内面) VI区SK04出土管玉 猫ノ谷遺跡出土遺物(1)
- 図版23 猫ノ谷遺跡出土遺物(2) 島田黒谷III遺跡V区調査風景

第1章 調査に至る経緯

昭和47年5月26日付けで、建設省松江国道工事事務所から島根県教育委員会に「国道9号バイパス」建設の基本設計資料として、島根県境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無について照会があった。そこで県教育委員会では、地元教育委員会の協力を得て、昭和47年、48年に遺跡の分布調査を実施した。これらの調査結果等をふまえ建設省からルート案が提示され、昭和48年7月には松江市東地区の予定ルートにかかる遺跡の取扱いについて協議があった。昭和49年7月には安来地区の清水一月坂間のルート案について協議があった。つづいて、昭和50年1月22日付けで県教育委員会と松江東地区と安来地区のうち清水一月坂間の一部について発掘調査の依頼があった。これを受け、昭和50年7月には建設省と契約を取り交わし、昭和50年度に、松江市竹矢町才ノ峰古墳群、同矢田町平所遺跡、安来市早田町大坪古墳群の発掘調査を昭和51年度には、松江市平所遺跡の関連再調査、東出雲町出雲郷夫敷遺跡の試掘調査を実施した。平所遺跡では、埴輪駕跡から馬・鹿・家・人物などの形象埴輪が出土し、52年6月には国の重要文化財に指定された。

昭和55年度・56年度には、昭和57年に開催が決定していた「くにびき国体」の主要幹線道路となる「松江東バイパス」（以前は「米松バイパス」と呼ばれていた）東出雲町出雲郷から松江市古志原町に至る5.4km間の7遺跡（東出雲町の春日遺跡、夫敷遺跡、松江市の布田遺跡、中竹矢遺跡、才ノ峰遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）のうち2車線分を緊急に調査した。

その後、「松江バイパス」は高規格道路に設計変更され「松江道路」となり、昭和60年に建設省から前回調査した7遺跡の残り4車線分の調査依頼があった。調査は昭和61年度から平成3年度まで順次行った。

昭和61年度には安来市島田町から同赤江町に至る延長6.9kmが「安来バイパス」として事業化されたが、昭和63年度には高規格道路に計画変更され、「松江道路」につなぐ東出雲町出雲郷一安来市吉佐町間の18.7kmの「安来道路」として実施されることになった。この計画変更で予定ルートにも変更が生じたため、昭和62年度・63年度に再度分布調査を実施した。発掘調査は、まず安来市赤江町から島田町に至る6.9km（インター部を含む）で平成元年度から同4年度まで7遺跡（安来市宮内町宮内遺跡、佐久保町大原遺跡、同臼コクリ遺跡、同岩屋口遺跡、黒井田町越峠遺跡、同才ノ神遺跡、島田町島田南遺跡）で実施し、平成4年度からは安来市荒島町一東出雲町出雲郷を「安来道路西地区」として、さらに、平成5年度からは安来市吉佐町一島田町を「安来道路東地区」として実施中である。

第2章 位置と環境

安来市島田地区は、もと能義郡島田村と呼ばれていた地域で、吉佐町、門生町、島田町、中海町、黒井田町からなっている。安来市の東の端に位置している。「出雲国風土記」に記載されている、意宇郡安来郷、楯縫郷、屋代郷に比定される地域であったと考えられている。⁽¹⁾吉佐町の南約1.5kmには、手間割が置かれていたといわれている。この場所は、まだ点として確定されている訳ではないが大きくずれるとは考え難く、古代山陰道と遺跡の関わりを検討し続けなければならない地域である。

北には中海がひろがり、南には中国山地から連なる山塊があり、その先端はいたるところで中海にせりだしている。中海に注ぐ河川はいずれも小さく、和田、細井、島田、門生、吉佐に小規模な平地が存在する。遺跡はこうした平地とその縁辺の丘陵上や斜面に集中して存在している。また、この丘陵地には筍や梨などの地域の特産品が栽培されている。

以下、周辺に存在する遺跡について概観してみたい。

安来市内では、縄文時代の遺跡は従来あまり知られていなかったが、今回の調査でこの島田地区から島田黒谷I遺跡や明子谷遺跡で縄文時代前期から後期にかけての土器が多量に検出され注目さ



第1図 周辺の遺跡位置図 S = 1 / 50,000

番号	遺跡名	所在地	種別	概要
1	四吉遺跡	安来市吉佐町	石蓋土壙墓	
2	カンボウ遺跡	安来市吉佐町	古墳、集落跡	堅穴住居跡、弥生土器、十師器、須恵器
3	石田遺跡	安来市吉佐町	古墳、集落跡	堅穴住居跡、弥生土器、十師器、須恵器
4	平ラII遺跡	安来市吉佐町	古墳、横穴墓、集落跡	古佐山I号墳、穴神横穴墓群、土師器、須恵器、布日瓦
5	平ラI遺跡	安来市吉佐町	集落跡	土師器、須恵器、布日瓦
6	山ノ神遺跡	安来市吉佐町	集落跡	弥生土器、土師器、須恵器
7	徳見沖遺跡	安来市吉佐町		
8	日曜遺跡	安来市吉佐町	横穴墓	
9	五反田遺跡	安来市吉佐町	集落跡	土師器、須恵器
10	陽徳遺跡	安来市門生町	集落跡	
11	陽徳寺遺跡	安来市門生町	集落跡	十師器、須恵器、陶磁器、五輪塔
12	門生黒谷I遺跡	安来市門生町	古墳他	五反田古墳群(前方後円墳、円墳)、土師器、円筒埴輪
13	門生黒谷II遺跡	安来市門生町	集落跡	土師器、須恵器、スラグ
14	門生黒谷I遺跡	安来市門生町	集落跡、窯跡	須恵器窯体、須恵器
15	鳥田黒谷II遺跡	安来市鳥田町	墳墓群等	木棺墓、箱式石棺、上塙墓、菅玉
16	鳥田黒谷II遺跡	安来市鳥田町	(散布地)	須恵器
17	島田黒谷I遺跡	安来市島田町	集落跡	繩文土器、弥生土器、十師器、須恵器
18	昔崎遺跡	安来市島田町	集落跡	堅穴住居跡、加工段、弥生土器、土築器
19	島田南遺跡	安来市島田町	集落跡	風呂建物跡、土築器、須恵器、菅原土器、へう焼き土器
20	才ノ洋遺跡	安来市糀井田町	集落跡	掘立柱建物跡、綠釉陶器
21	越峰遺跡	安来市黒井山町	集落跡	堅穴住居跡、加工段、弥生土器、土築器、須恵器
22	岩戸口遺跡	安来市佐久保町	集落跡、横穴墓	堅穴頭、船形頭、斜土塁、埴輪、瓶、灰瓦、圓
23	曰コクリ遺跡	安来市佐久保町	集落跡、横穴墓	堅穴頭、砖土塁、上磚、埴輪、单脚炉火、灰瓦、瓦
24	大原遺跡	安来市佐久保町	集落跡、横穴墓	堅穴頭、瓶、土築器、上磚、埴輪、瓦
25	宮内遺跡	安来市宮内町	集落跡、横穴墓	堅穴頭、制土器、土築器、鐵劍、家形石器、大刀、盾牌、瓦
26	国吉山古墳群	安来市吉佐町	古墳	
27	吉佐古墳	安来市吉佐町	古墳	円墳3基
28	六の坪遺跡	安来市吉佐町	集落跡	土師器、須恵器
29	神代塚古墳	安来市吉佐町	古墳	横穴式石室、須恵器
30	吉佐貝施塚	安来市吉佐町	古墳	
31	神宝古墳群	安来市吉佐町	古墳	円墳
32	袖田・古墳群	安来市吉佐町	古墳	
33	四方神古墳	安来市吉佐町	古墳	方墳
34	平横穴群	安来市吉佐町	横穴墓	直刀、須恵器、陶棺、円筒埴輪
35	河原崎古墳群	安来市吉佐町	古墳	2基
36	八幡山通跡	安来市吉佐町	散布地	十師器
37	茶屋山煙草寺	安来市吉佐町	寺院跡	須恵器、土師器、布日瓦
38	八幡山古墳	安来市吉佐町	古墳	箱式石棺、鉄劍、合せ口土器棺
39	鷲横穴	安来市吉佐町	横穴墓	四注式妻入り
40	塚根山古墳群	安来市吉佐町	古墳	2基
41	塚根山横穴群	安来市吉佐町	横穴墓	4穴、四注式平入り
42	小枝宅遺跡	安来市吉佐町	散布地	石斧
43	山ノ神古墳	安来市吉佐町	古墳	
44	松本古墳	安来市吉佐町	古墳	箱式石棺
45	八坂古墳	安来市門生町	古墳	円筒埴輪
46	八坂經塚	安来市門生町	經塚	
47	陽徳経塚	安来市門生町	經塚	一字一石経
48	小崎遺跡	安来市門生町	散布地	弥生土器
49	下II古墳群	安来市門生町	古墳	円墳2基
50	和田古墳群	安来市門生町	古墳	円墳2基
51	常福寺山上古墳	安来市門生町	上塙墓	
52	山根古墳	安来市門生町	古墳	前方後円墳
53	人成神社古墳	安来市門生町	古墳	方墳か?

54	門生・山根遺跡	安来市門牛町	集落跡	堅穴住居跡、櫻形はそう
55	黒谷古墳群	安来市門牛町	古墳	方墳、円墳
56	ウガフキ新跡	安来市門牛町	鉢跡	スラグ
57	門生古窯跡群高畠地区	安来市門牛町	窯跡群	須恵器物原、須恵器工房跡
58	門生古窯跡群山根地区	安来市門牛町	窯跡群	須恵器物原
59	明子谷遺跡	安来市島田町	散布地	繩文土器、弥生土器、須恵器
60	東谷古墳群	安来市島田町	古墳	人物埴輪
61	ちょう塚古墳	安来市島田町	古墳	円墳、陶棺
62	赤崎山横穴	安来市島田町	横穴墓	丸天井形
63	岩崎宅横穴	安来市須崎町	横穴墓	直刀、須恵器
64	高畠古墳	安来市黒井田町	古墳	円墳、円筒埴輪、須恵器
65	小馬木遺跡	安来市黒井田町		古墳周溝
66	浜小崎遺跡	安来市黒井田町	古墳、横穴墓、集落跡	前方後円墳、形象埴輪
67	長曾遺跡	安来市黒井田町	集落跡	堅穴住居跡、須恵器、土師器
68	黒鳥横穴群	安来市黒井田町	横穴墓	3穴以上
69	大日さん古墳	安来市黒井田町	古墳	円墳、葺石、円筒埴輪
70	大納言山古墳	安来市黒井田町	古墳	円墳、刀、劍2
71	たら谷御跡	安来市黒井田町	鉢跡	スラグ
72	猫ノ谷遺跡	安来市黒井田町	集落跡	堅穴住居跡
73	越崎古墳	安来市黒井田町	古墳	
74	綱谷遺跡	安来市清水町	集落跡	堅穴住居跡
75	長曾土壙墓群	安来市黒井田町	土壙墓群	3群、弥生土器
76	姉畠遺跡	安来市黒井田町	散布地	弥生土器、土師器
77	高広遺跡	安来市黒井田町	集落跡、横穴墓	堅穴、圓筒埴輪、鉢形土器、嗣石器、須恵器
78	客さん古墳	安来市黒井田町	古墳	長持形石棺2、須恵器
79	佐久保山古墳	安来市黒井田町	古墳	円墳
80	長樋谷遺跡	安来市黒井田町	散布地	須恵器
81	大神谷古墳群	安来市佐久保町	古墳	前方後円墳、円墳
82	大荒神土壙墓	安来市佐久保町	土壙墓	
83	寺谷遺跡	安来市黒井田町	散布地	弥生土器、土師器、須恵器
84	丸山古墳	安来市早田町	古墳	
85	堂面土壙墓	安来市佐久保町	土壙墓	土師器
86	早田古墳	安来市早田町	古墳	
87	叶谷遺跡	安来市早田町	集落跡、古墳	堅穴住居跡、弥生土器
88	玉造上壙墓	安来市佐久保町	土壙墓	
89	玉造遺跡	安来市佐久保町		
90	禿前古墳	安来市佐久保町	古墳	円墳
91	尾女塚古墳	安来市黒井田町	古墳	前方後円墳、葺石、円筒埴輪、持形石棺、銅鏡、須恵器

表1 周辺の遺跡

れた。いずれも2次的に流れ込んだ土層に包含されており、遺構は認められなかったが、付近に大きな集落跡があることが推定される。

弥生時代になると、前期の遺跡は明らかでないものの、中期の後半には山の神遺跡、高広遺跡などで、堅穴住居跡がみつかっている。弥生時代後期には猫ノ谷遺跡⁽⁴⁾、普請場遺跡⁽⁵⁾、カンボウ遺跡⁽⁶⁾、石田遺跡⁽⁷⁾などで集落が営まれるようになった。また、長曾土壙墓群⁽⁸⁾のような群集する土壙墓もつくられたり、島田黒谷Ⅲ遺跡⁽⁹⁾のような木棺墓も出現する。

古墳時代前期には、箱式石棺と古式土師器の土器棺を埋葬施設とし鐵劍2本を出土した八幡山古墳（円墳）⁽¹⁰⁾や箱式石棺3基が計画的に配置された吉佐山根1号墳（方墳）⁽¹¹⁾が知られている。また、

鳥田黒谷 I 遺跡では古式土師器が出土する溝跡があり、生活の痕跡をとどめている。

古墳時代中期になると、鳥田地区の遺跡は一挙に増加する。まず、古墳としては、全長50mの前方後円墳で荒島石製の櫛掛突起を持つ舟形石棺を埋葬施設とする尼壳塚古墳⁽¹⁾が挙げられよう。この古墳は、河原石を主とした葺石を施し、円筒埴輪を巡らせており、遺物としては棺外からは鉄矛1、鉄劍3以上が、棺内からは鉄劍2以上、金銅製空玉3が副葬されていた。墳形が前方後円墳であること、比較的豊富に金属製品を副葬していたこと、また『出雲國風土記』に記載されている語臣猪癪呂に縁の古墳として伝承され、現在でも、月の輪神事として祭事が行われていることは注目される。生産遺跡としては、出雲地方で最も古い須恵器窯跡の一つで山陰須恵器編年のI期とされる門生占窯跡群⁽²⁾が存在する。この古窯跡群は、高畠地区と山根地区からなっている。高畠地区は、従来高畠古窯跡群と呼ばれていた所で複数の物原があり、窯の本体も複数存在するものと推察されている。なお、昭和56年に中国電力(株)の鉄塔建設に伴って安来市教育委員会が同地区で実施した発掘調査では、須恵器工房跡が確認されている。山根地区では、高畠地区より1段階古いと考えられる須恵器が物原から採集されている。今年度の安来道路東地区の発掘調査においては門生黒谷 I 遺跡のトレンチから、この地区に属すと考えられる須恵器窯跡本体が確認され、平成6年度の本調査が期待されるところである。平ラ II 遺跡では玉作関係の遺物が検出されている。安来市で玉作遺跡といえば、平成4年に佐久保地区の安来道路地内で発掘調査した大原遺跡⁽³⁾が著名であるが、時期もほぼ同じと考えられることから、安来の玉作も相当広範囲に分布している可能性もある。集落跡としては、I期の須恵器を伴う堅穴住居跡が確認された集落跡として、長曾遺跡、門生山根遺跡、カンボウ遺跡などがある。

古墳時代後期になると、尼壳塚古墳の東の丘陵に長持形石棺2を埋葬施設とする客さん古墳⁽⁴⁾が築造される。また、吉佐には横穴式石室を埋葬施設とする神代塚古墳⁽⁵⁾と吉佐貝姫塚が隣接して存在する。安来市においては、横穴式石室は飯梨川以西に主に分布し、飯梨川以東ではこの吉佐の2例しか存在しない。その他、主要な谷には横穴墓が造られるようになる。断面一三角形で、平入りの横穴墓が主流を占めることは安来の他の地域と変わらない。特筆すべき横穴墓として、横口式の家形石棺を有し、双竜環頭大刀が出土した高広IV区1号穴⁽⁶⁾、端正な横口式の家形石棺に赤色の彩色を施す穴神1号横穴墓⁽⁷⁾がある。集落跡としては、カンボウ遺跡、石田遺跡、山の神遺跡、高広遺跡などが知られている。

奈良時代には、五反田遺跡、昔請場遺跡、島田南遺跡などで集落跡が確認されている。とりわけ、島田南遺跡では、墨書き土器、ヘラ描き土器、スラグが出土し、古代の役所との関連も考慮されている。

以上、原始から古代にかけての島田地区を概観したのであるが、この地区は古代において、飯梨

川、古田川、伯太川の3本の河川の織りなす安来平野に面する他の地域とは、平地の規模からして米作りを主とする農業生産基盤が小さかったことは想像に難くない。しかしながら、古墳時代中期の門生古窯跡群の出現や飯梨川の東側では古佐地区だけに横穴式石室が構築されることは、単に生産基盤だけでは解決の出来ない問題であり、もっと他の観点からのアプローチが必要となろう。今後、古墳、横穴墓、集落跡の詳細な検討がまたれるところである。

註

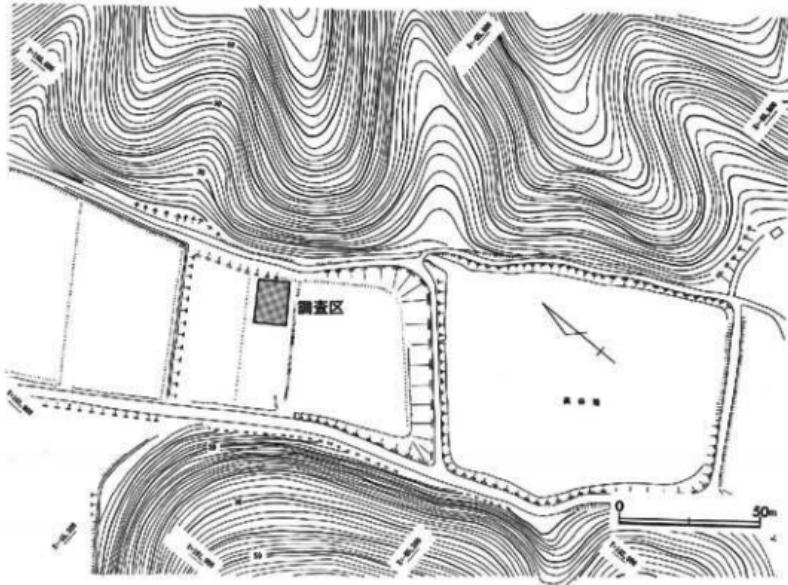
- (1) 加藤義成校註 『出雲国風土記』 昭和40年12月 松江今井書店
- (2) 平成5年安来道路東地区トレンチ調査
- (3) 島根県教育委員会 『高広遺跡発掘調査報告書－和田園地造成工事に伴う発掘調査－』 1984年3月
- (4) 本報告書所収
- (5) 平成5年安来道路東地区発掘調査
- (6) 島根県教育委員会 『石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡－一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書－VII』 1994年3月
- (7) 註6と同じ
- (8) 安来市教育委員会 『長曾土壤墓群』 昭和56年
- (9) 註4と同じ
- (10) 東森市良 『7章 八幡山古墳』『安来市内遺跡分布調査概報II－(宇賀荘・島田・安米地区)－』 1989年3月 安来市教育委員会
- (11) 註5と同じ
- (12) 山本 清 『山陰の石棺について(割竹形・舟形系の石棺)』『山陰文化研究紀要』7号 昭和41年
- (13) 大森隆雄・ト部吉博 『門生古窯跡群山根地区の古窯』『島根県生産遺跡分布調査報告書 窯業関係』 1985年3月
- (14) 永見 英ほか 『鳥根県安来市門生の高烟遺跡の調査』『日本考古学年報』34 昭和59年
- (15) 註5と同じ
- (16) 島根県教育委員会 『一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V(大原遺跡)』
- (17) 大森隆雄氏から教示
- (18) 三宅博士氏から教示
- (19) 山本 清 『山陰の石棺について(長持形系の石棺)』『山陰文化研究紀要』8号 昭和42年
- (20) 安来市教育委員会 『安来市内遺跡分布調査概報II－(宇賀荘・島田・安米地区)－』 1989年3月
- (21) 註3と同じ
- (22) 山本 清 『山陰の石棺について(家形系の石棺)』『山陰文化研究紀要』10号 昭和45年
- (23) 註2と同じ
- (24) 島根県教育委員会 『一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書III(島田南遺跡)』 1992年3月

第3章 明子谷遺跡

第1節 調査の概要

明子谷遺跡は安来市街の東約2kmの同市島田町に所在する。当遺跡は中海からややはいった標高60~70mの低丘陵に挟まれた幅約70~80m、長さ約1kmの通称黒谷と呼ばれる小支谷の谷底に位置し、現在は谷水田として利用されている。周辺の遺跡では約500m北に縄文前期~晩期の遺物等が出土した島田黒谷Ⅰ遺跡、弥生中~後期・奈良時代の集落が検出された普請場遺跡、島田南遺跡が所在し、東方約700mには初期須恵器の窯跡として著名な門生古窯址群高畠支群、同古窯址群山根支群などが存在する。

当遺跡の調査は国道9号バイパス安来道路建設に伴う中国電力送電線鉄塔移設工事による事前調査として実施したもので、試掘調査の結果に基づき鉄塔移転予定地の16×12mの範囲について調査を実施した。調査は5月25日から重機による耕作土掘削を開始し、溝1条のほか縄文時代~古墳時代にかけての遺物を検出し、6月18日に調査を終了した。



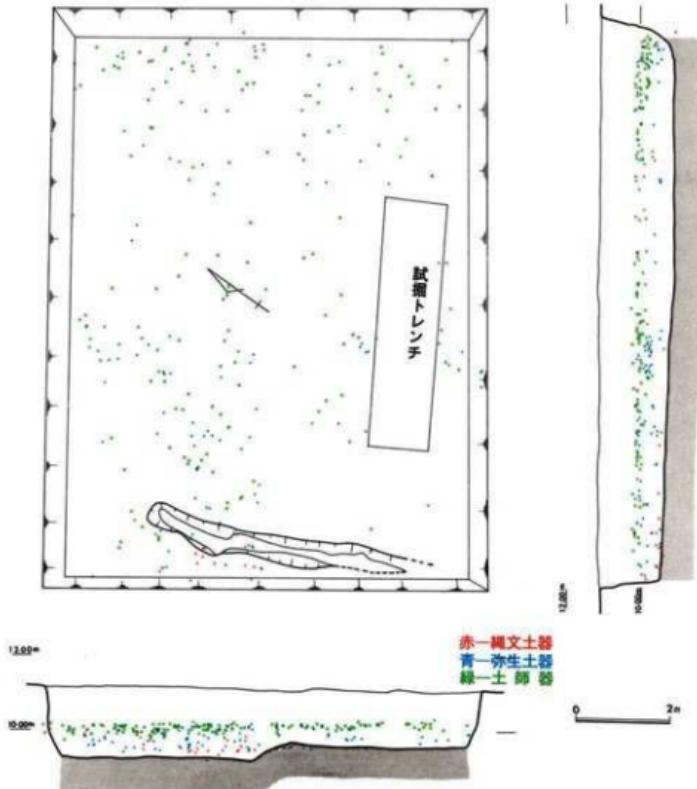
第2図 明子谷遺跡 調査区配置図

第2節 検出した遺構・遺物

(1) 基本層序・遺物分布状況（第3・4図）

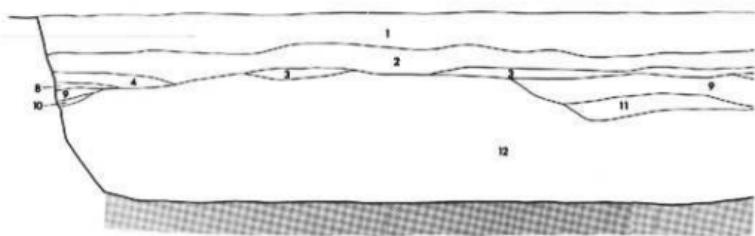
当遺跡の基本層序は現在水田として利用されている耕作土の直下に厚さ約30cmの灰褐色粘質土（2層）が堆積し、その下に灰白色粘質土（2層、厚さ約10~30cm）、青灰色砂礫土（東壁12層・南壁10層、厚さ約100cm）の順で堆積している。近辺のボーリング調査結果ではこの礫層は深さ6mに達することが判明しており、当遺跡の場合もこの青灰色砂礫土は今回の掘り下げ面よりさらに下に続くものと思われる。

この分厚い青灰色砂礫層に含まれる岩石は周辺の岩相と一致し、大雨による出水時の際、周辺の



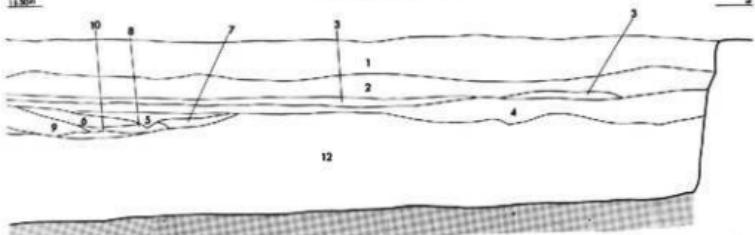
第3図 明子谷遺跡遺構配置図・遺物分布状況図

E 1150m



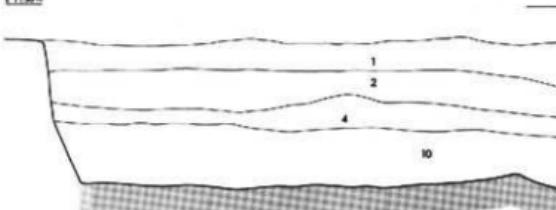
調査区東壁セクション(1)

E 1150m



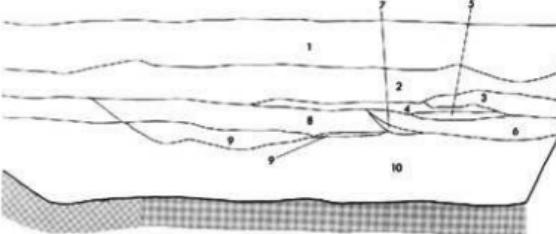
調査区東壁セクション(2)

E 1150m



調査区南壁セクション(1)

E 1150m



調査区南壁セクション(2)

(東壁)

- 1層 暗赤褐色粘質土（耕作土）
- 2層 灰褐色粘質土（地山ブロックを多く含む）
- 3層 暗灰褐色粘質土（地山ブロックを若干含む）
- 4層 灰白色粘質土（地山ブロックを若干含み、やや砂質）
- 5層 灰茶褐色砂土
- 6層 灰白色粘質土（4層よりやや暗い）
- 7層 増灰褐色粘質土
- 8層 黑褐色粘質土（やや灰色を帯びる）
- 9層 青灰褐色砂礫土（比較的小形の河原石を多く含む）
- 10層 黑褐色粘質土（しまりなく粘性高）
- 11層 青灰色粘質土（小礫を多く含む）
- 12層 青灰色砂礫土（やや大形の河原石を多く含む）

(南壁)

- 1層 暗赤褐色粘質土（東壁と同じ）
- 2層 灰褐色粘質土（” ”）
- 3層 暗灰褐色粘質土（” ”）
- 4層 灰白色粘質土（” ”）
- 5層 青灰褐色粘質土（礫を含まない）
- 6層 増灰褐色砂利土（一部木質片を含む）
- 7層 灰白色粘質土
- 8層 青灰褐色砂礫土（大形の礫を含まない）
- 9層 灰褐色砂礫土（土質は8層と同一）
- 10層 青灰色砂礫土（東壁12層と同一）

第4図 明子谷遺跡調査区東・南壁土層図 S=1/60

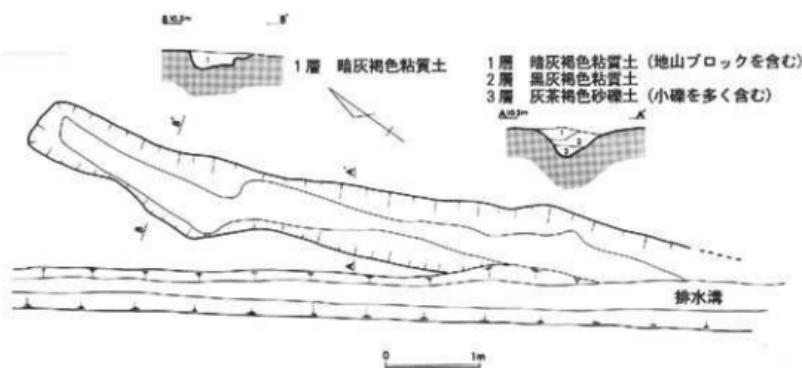
丘陵から流れ込んで形成された堆積層であると考えられ、今回の調査で出土した遺物も周辺の造跡からの流れ込みである可能性が高い。灰褐色粘質土と青灰色砂礫土との間には部分的に流木などを含む黒褐色粘質土がレンズ状に入っている状況が認められた。この黒褐色粘質土は青灰色砂礫土中にも数ヶ所認められ部分的には分層が可能であり、この砂礫層が幾度にもわたって形成された堆積物であることを示すものと思われる。⁽¹⁾

遺物は各層から出土しているが、主として青灰色砂礫土（東壁12層・南壁10層）から比較的まとまって出土している（第3図）。2～4層中からは古墳時代後期以降の須恵器・土師器を若干検出したほかは弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての遺物包含層である。青灰色砂礫土からは、上層から2～4層と同じく弥生後期末～古式土師器が出土しているが、下層からは縄文時代後期の土器が出土している。しかし一部では混在する状況で出土しており、今回の調査では層位的には明確に分離することができなかった。遺物の分布状況は弥生土器・古式土師器では特に有意なまとまりは認められなかったが、縄文土器は調査区南西部に比較的まとまって認められた。

（2）検出した遺構

SD-01（第5図）

今回の調査で検出した遺構は溝SD-01のみである。SD-01は調査区南西部で検出した遺構で、2層（灰褐色粘質土）上面から掘り込み、底面は青灰色砂礫土層に達している。調査区内で確認した範囲では、長さ約7m、幅0.5～0.9m、深さ0.2～0.3mを測る。溝内の埋土は上から暗灰褐色粘質土、黒灰褐色粘質土、灰茶褐色砂礫土の順で堆積しており、埋土中からは土師器の細片が若干出土している。遺構の性格・年代については不明と言わざるをえないが、掘り込み面の灰褐色粘質土上



第5図 明子谷遺跡SD-01実測図 S=1/60

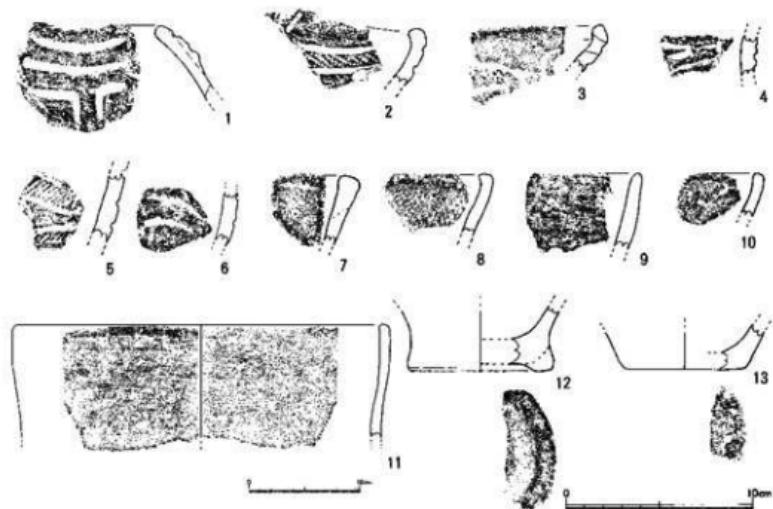
中からは古墳時代後期以降の須恵器が出土していることからそれ以降に掘られたものであると考えられる。

(3) 出土遺物

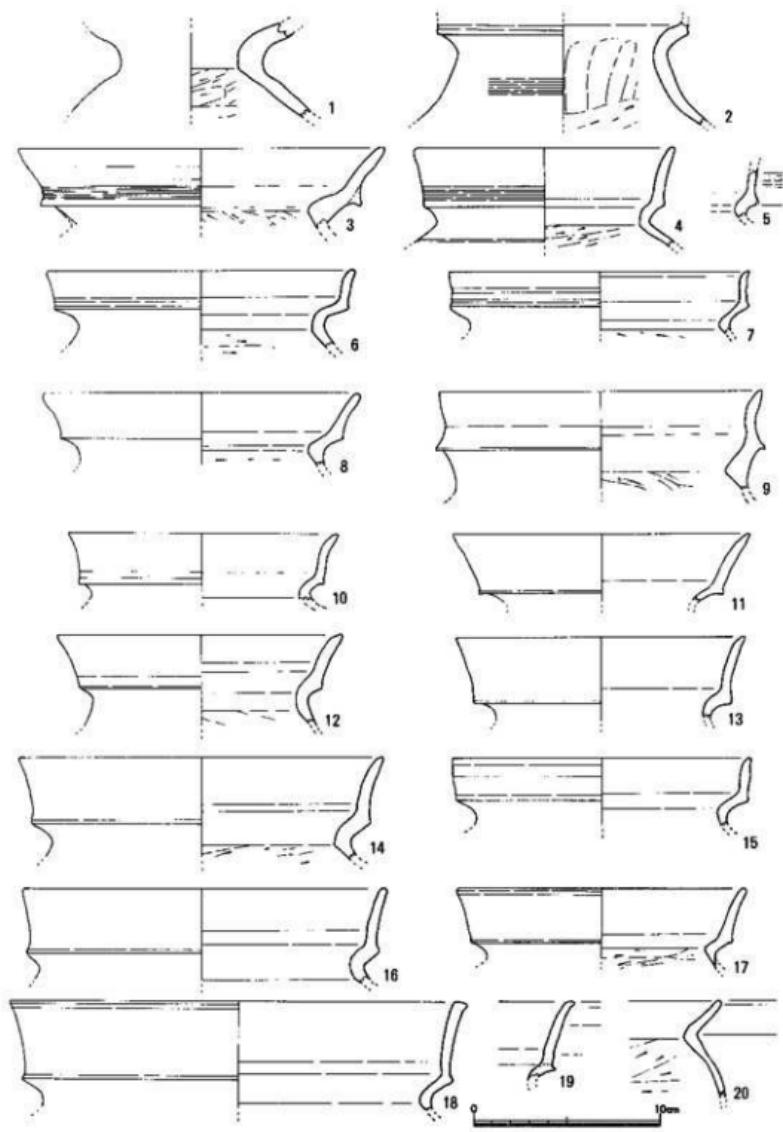
前述のとおり当遺跡では造構に伴う遺物は殆ど無く、下層から縄文土器が出土する傾向はあるものの層位的に明確に分離できないことから、以下時代別・種別ごとに記述を行う。

縄文土器（第6図）

今回の調査で出土した縄文土器は細片のものが殆どで、いずれもローリングを受け摩滅が著しい。同化し得たのは13点のみで、いずれも後期前半のものである。1～6は精製土器である。1は強く内湾する器形をもつ浅鉢で、口縁部外面に幅広の粘土帯を貼りつけて肥厚させ2条の沈線を施す。口縁部直下にも同様な沈線がめぐり下方へ屈曲している。2 mm前後の砂粒を多量に含み調整は摩滅の為不明。2は波状II縁で2条磨消縄文帯を施す深鉢で、口縁端部は内面へ丸く肥厚させ波頂部付近上面に沈線を施す。磨消縄文帯は14mmと幅が狭くR Lの縄文を施す。3も2と同様口縁端部を丸く肥厚させるもので、口縁直下に径1.0cmの貫通孔があり、周囲を沈線がめぐらしている。摩滅が著しいため断言できないが、2条の沈線間に縄文が施されていたものと思われる。4は小片の為詳細は不明だが深鉢の頸部と思われる資料。比較的細い沈線間にかすかにR Lの縄文が観察される。5も2条磨消縄文帯をもつもので、縄文帯の幅は16mmを測り中にL Rの縄文を施す。沈線は連続せ



第6図 明子谷遺跡出土縄文土器 11以外はS=1/3、11はS=1/5



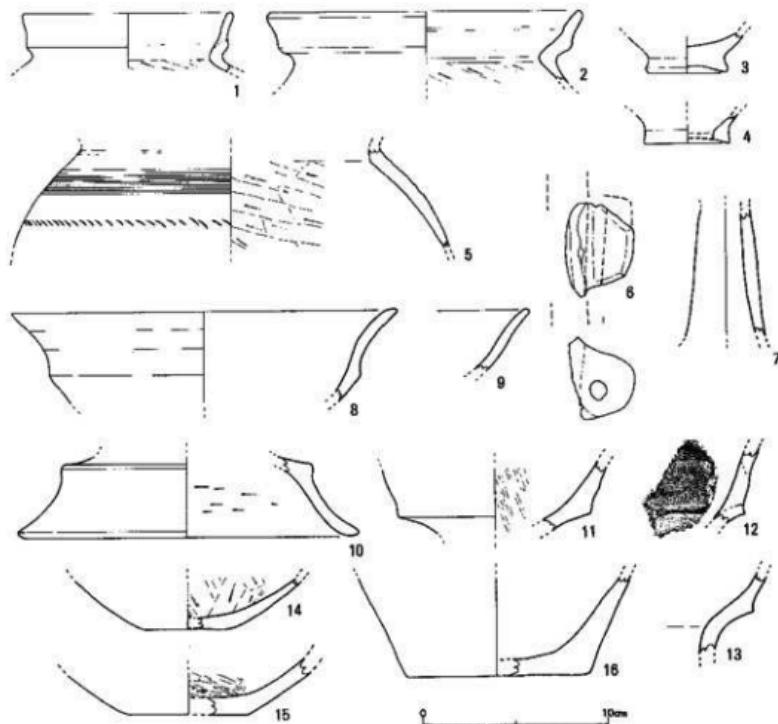
第7図 明子谷遺跡出土弥生土器・古式土師器（1）

す、途切れた部分が認められる。6も2条の沈線帯が認められるが、摩滅が著しく詳細は不明。

7~11は粗製深鉢の口縁部である。口縁部端部の形状には2・3と同様内面にやや屈曲し肥厚させるタイプ(8)や端部にむかって次第に厚みを増し上面に平坦面を形成するタイプ(7)、やや先細り状で丸く収めるタイプ(9)などバラエティに富む。器形が複雑な資料は11のみだが11は頸部が若干くびれ口縁部が内湾気味にゆるく立ち上がる。調整は摩滅の為観察しうる資料に乏しいが、8、9、11は外面に横方向の粗いナデ調整による砂粒の動きが観察される。

12・13は底部資料である。12は低い高台をもつ上底のもので、底部下端部は外側にやや踏張り気味になる。13は小片の為断言できないが平底の資料と思われる。外面に横方向の粗いナデ調整が認められる。

弥生土器・古式土師器(第7・8図)



第8図 明子谷遺跡出土弥生土器・古式土師器(2) S=1/3

弥生上器・古式土師器は今回の調査ではもっと多く出土した。1は壺の頸部である。頸部がよくしまるタイプで内面頸部以下は横方向にヘラケズリを施す。2も壺の口縁部から頸部にかけての資料である。II縁部上半を欠損しているが、口縁部下半部には浅い凹線が認められる。外面調整は頸部以下横ハケ、内面調整は頸部はタテ方向のユビナデ、頸部以下はヘラケズリを施す。1、2は器形、内面の調整、凹線文などから中期末～後期前半代のものと思われる。

第7図3～20、第8図1・2は弥生時代後期後半～古墳時代前半の壺口縁部である。口縁形態、文様の有無によって複合口縁のものをA類、単純口縁のものをB類とし、△類を5つに細分する。
A 1類（第7図3～5）…口縁部に擬凹線を施すもの。1はゆるやかにカーブを描きながら外反し、屈曲部の稜は斜め下方向に突出する。口縁部端部はやや肥厚して丸く收め、II縁部上半の擬凹線文をナデ消している。4は摩滅が著しいが、口縁部下半部にかすかに擬凹線文が観察される。1とは異なり口縁端部は先細り状の断面形を呈する。

A 2類（同図6～15）…複合口縁外面の擬凹線文が消えるが、なお緩く弧を描きながら外反し、口縁端部断面形が先細り状を呈するもの。口縁屈曲部の稜はなお斜め下方向への突山を指向する傾向にある。あまり外反せず直立気味に立ち上がり、立ち上がり部が短いもの（7・15）や強く外反するタイプ（10）、やや薄手で立ち上がりの長いタイプ（13）、やや直線的に立ち上がるタイプ（11）などバラエティに富むが括している。

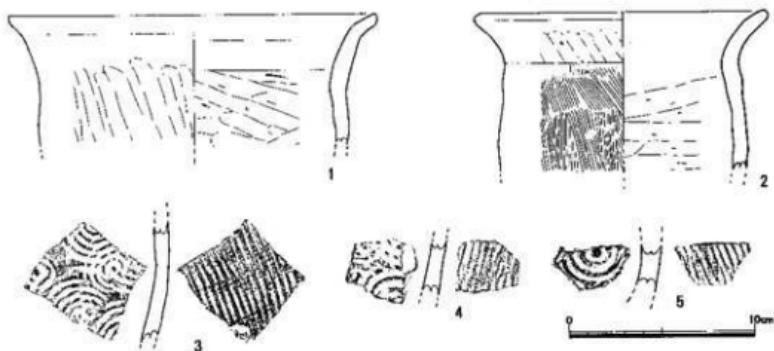
A 3類（同図16・17・19）…口縁部が直線的に立ち上がりII縁端部に明確な平坦面を形成しないタイプ。口縁部屈曲部の稜は横方向の突山を指向するものが多い。口縁部端部は丸く收めるもの（16）、やや外方に折り曲げ気味となるもの（17・19）があるがいずれも明確な平坦面を形成していない。

A 4類（同図18）…II縁部が直線的に立ち上がり端面に明確な平坦面を形成するもの。口縁部の稜は横方向に突出する。

A 5類（第8図2）…器壁が厚くなり口縁部の立ち上がりも短くなつて屈曲部の稜が鈍いタイプ。内面もなだらかになり稜を形成しない。

B類（第7図20）…1点のみ出土。口縁部は胸部から棱をなして屈曲し、若干内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く收め内面肥厚等は認められない。胸部は頸部以下ヘラケズリ。

第8図5は壺胴部の破片。上半部は横ハケ調整、やや下がったところに逆「ノ」の字刺突文を施す。同図3・4は低脚壺の底部で、風化の為調整は不明。6は瓶形上器の把手部分と思われる。体部に貼り付ける際の接合痕が観察できる。7～9は高壺である。7は脚部、8・9は壺部の破片。8は壺部は屈曲部で棱をなし緩やかに外反するタイプで端部はやや先細り状に引き出す。淡赤褐色を呈し、胎土は比較的緻密。調整は風化の為不明。9も同じく高壺の壺部である。小片であるため断言できないが、8と異なり稜を形成せず、緩やかに屈曲し外反するタイプのようである。



第9図 明子谷遺跡出土土師器・須恵器 S=1/3

10～13は鼓形器台である。10は下台部の破片で緩いカーブを描いて外反するもので、筒部の縮約がまだあまり進行していない段階のタイプだと思われる。外面は剥離の為文様の有無、調整等は不明。内面は横方向のヘラケズリのちナデ、脚端部はヨコナデで仕上げる。11は上台部の破片と思われる。かすかにミガキ痕が観察される。12も鼓形器台の上台部と思われる。外面にややだれた横描波状文を施す。

14～16は底部の破片である。今回の調査で出土した底部資料はいずれも平底で、丸底、尖り底のものは認められない。14・15は底部から胴部下半への屈曲が穢をなさず緩やかなもので内面はヘラケズリを施す。16は底部と胴部下半が穢をなすもので内面は縦方向のナデ調整。時期的に14・15よりさかのぼるものと思われる。

須恵器・土師器（第9図）

第9図は古墳時代後期以降の須恵器・土師器である。これらは前述のとおり青灰色砂礫土中から出土せず、灰褐色粘質土（2層）・灰白色粘質土（4層）中からのみ出土した。

1・2は土師器の甕である。1は胴部が張らず口縁部へむかって緩やかに外反し端部付近で「く」字状に外方へ折れ曲がり端部は丸く收める。外面は頸部以下粗い縦方向のユビナデ、内面はやや下がった位置から横方向のヘラケズリを施し、II縁部付近はヨコナデで仕上げる。2は小形の甕である。1と同じく胴部があまり張らない器形だが、頸部で緩い穢をなし口縁部はやや上方へ直線的に立ちあがる。口縁端部は面を形成せず丸く收める。調整は外面は頸部以下タテハケ、内面は頸部以下横方向のヘラケズリ、II縁部はヨコナデを施す。

3～5は須恵器甕の胴部片である。いずれも青灰色を呈し、外面は平行タタキ、内面に同心円文

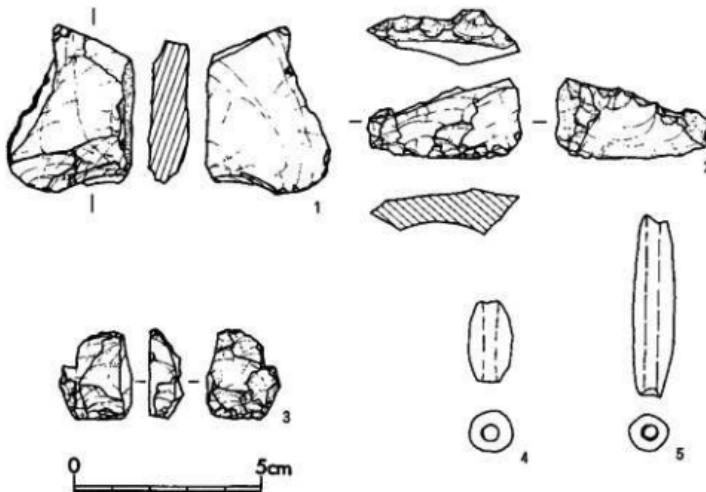
が認められる。

石器（第10図1～3）

石器は3点出土しており、いずれも縄文時代に属するものであると考えられる。3点とも黒曜石製で漆黒色を呈する。1はやや幅広の剥片で長さ4.4cm、幅3.2cm、厚さ1.1cmで重さ15.8gを測る。一部自然面が残存する。2は加工痕のある剥片で、長さ4.1cm、幅2.0cm、厚さ1.4cm、重さ7.7gを測る。刃部に細かな剥離痕が連続しており、側面にも急角度の凹凸が加えられている。3は楔形石器である。やや小形のもので長さ2.3cm、幅2.0cm、厚さ0.9cm、重さ3.5gを測る。正面右側辺には下方からの截断面が認められ、下縁には小剥離痕とツブレがみられる。

土鍤（第10図4・5）

土鍤は2点出土しており、いずれも灰褐色粘質土（2層）中からの出土である。4は小形のもので長さ2.3cm、幅1.2cm、重さ2.7gを測る。赤褐色を呈し、焼成は良好。5は紡錘形を呈するタイプで、長さ4.9cm、幅1.1cm、重さ3.9gを測る。製作の際の指頭による凹凸が目立つ。灰白色を呈し焼成は良好。



第10図 明子谷遺跡出土石器・土鍤 S=2/3

第3節 小結

今回の調査では遺構としては溝1本を検出したのみであったが、縄文時代後期から古墳時代後期以降にわたる遺物を検出した。以下、出土遺物を中心に若干のまとめを記しておきたい。

(1) 縄文土器

今回の調査で出土した縄文土器のうち有文土器の大部分（第6図2～6）は2条の沈線による幅の狭い磨消縄文帯をもち沈線が途切れるもので、口縁部のわかる資料（2・3）はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部端部は内面にやや拡張させる特徴をもつ。こうした特徴をもつ土器は県内では額原町立明田遺跡に良好な資料がみられ⁽³⁾、福田KII式古段階に比定されている⁽²⁾。今回出土した土器群も大部分はこの段階のものだと思われる。1の口縁部が大きく内傾し肩部が強く張る器形をもち外面を肥厚させるものは松江市石台遺跡⁽⁴⁾、香川県永井遺跡⁽⁵⁾等に比較的類似する資料があり、それぞれ津雲A式～彦崎KI式、永井I式（津雲A式併行）に位置付けられている。このようにおおまかには縄文土器群に伴うものであると思われるが、当遺跡例は口縁帯の下にも文様が認められることからその正確な位置付けについては類例の増加をまって改めて検討を試みたい。

なお当遺跡の北約500mに位置する島田黒谷I遺跡からはやはり後期を中心とした資料が比較的まとまって出土している。今までの安来・能義地域における縄文時代の様相は不明瞭な点が多くただけに今後の整理・研究が期待される。

(2) 弥生後期土器・古式土師器

今回の調査で出土した弥生後期土器・古式土師器は包含層資料でありセット関係等は不明である。もっとも量の多い甕についてその位置付けについてみてみた場合、A1類は從来の的場式、草田編年⁽⁶⁾の草田3期に相当し、A4類は小谷式古段階、草田7期に位置付けられると考えられる。A2、A3は型式学的には前後関係におかれ、從来の鍵尾A～5号墓式～大木式、草田4～6期に相当する資料だと思われるが、今回の資料は断片的なものであり内容もバラエティに富むことから明確な位置付けについての明言は避けておきたい。

当地域において当該期の土器は普遍的に発見されるが未だ良好な一括資料に恵まれず、特にセット関係についてはなお不明な点が多い。弥生時代から古墳時代へ急激に転換する当該期の研究が土器編年研究に拠るところが多大なだけに、他地域との併行関係・器種組成を明確にした編年網の整備が早急に望まれるところである。

第4章 島田黒谷Ⅱ遺跡

第1節 調査の概要

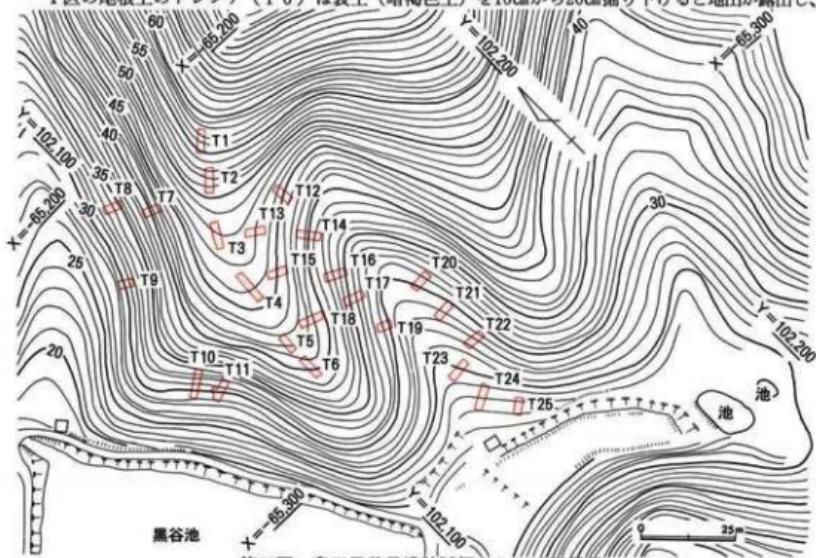
島田黒谷Ⅱ遺跡は安来市島田町黒谷の標高20mから40mにかけての丘陵に位置する。黒谷池の北西側にあたり、尾根部分はやや平坦になっている。当遺跡は島根県遺跡地図A 3 8 2に登録されている周知の遺跡（散布地）であることから本調査に備える意味での試掘調査を実施した。

第2節 調査の結果

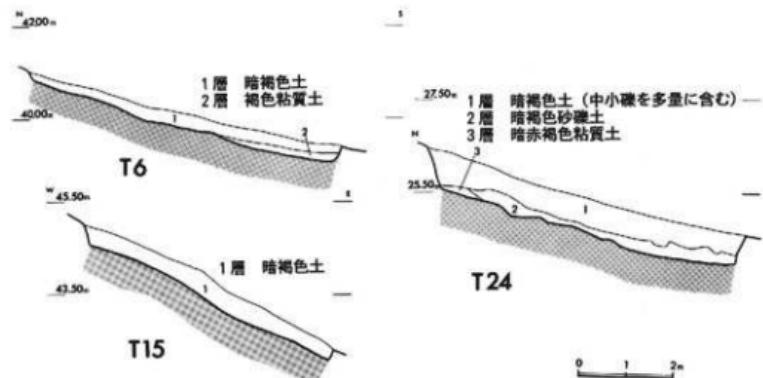
調査は谷をはさんで西側をI区、東側をII区としてトレンチを設定して試掘調査を行なった。I区は尾根上に6本、西斜面に3本、南斜面に2本、東斜面に8本、トレンチを設定し、II区は西斜面に6本のトレンチを設定した。（第11図）

I区の西斜面と尾根部分は果樹園として造成されており、旧地形はほとんど残っていなかった。南斜面は急斜面で崩落が多く見られ、東斜面は竹林となっていた。II区は梨畠として使われていた緩斜面であるが、上部から崩落した多量の土砂が堆積していた。

I区の尾根上のトレンチ（T6）は表土（暗褐色土）を10cmから20cm掘り下げるとき地山が露出し、



第11図 島田黒谷Ⅱ遺跡試掘トレンチ配置図



第12図 T 6, T 15, T 24 土層図

遺構等は検出できなかった。東斜面のトレンチ（T15）も表土の下は地山であり、遺構は検出できなかった。南斜面、西斜面についても同様であった。

II区のトレンチのT24からは須恵器等が表土下の暗褐色砂礫土から出土した。しかし、これらは上部からの崩落であると思われ、遺構に伴う遺物ではない。

遺物についてはT24より高台付の須恵器の壊（1）が出土したが、摩滅がひどく調整等については不明である。T 2 4

第13図 島田黒谷Ⅱ遺跡出土土器
からは壺の胴部の破片（4）も出土した。外面は平行タタキ、内面は同心円文が認められる。他の遺物としてはT11から壺身の口縁部（3）、T 15より高台付の壺身が出土した。いずれも奈良時代以降の須恵器であると考えられる。

第3節 小結

このように、島田黒谷Ⅱ遺跡はかなりの部分が、果樹園造成による削平をうけており、遺物は少量出土したもの、遺構については殆ど確認できない状態であると判断し、試掘調査によって当遺跡の調査を終了した。

第5章 島田黒谷Ⅲ遺跡

第1節 調査の概要と経過

島田黒谷Ⅲ遺跡は島田黒谷Ⅱ遺跡の南に位置し、北西から東南方向への標高30～60mの丘陵部約300mにわたってひろがる遺跡である。IV・V区の北方及び東方には有名な門生占窯址群高畠支群および同古窯址群山根支群が隣接する。

発掘調査に先立ち実施した分布調査において、同丘陵上に径15～20m程度の円墳もしくは方墳状の高まりが確認され、今回の発掘調査は「島田黒谷1号墳」の名称で文化庁へ文化財保護法第98条の2による発掘届出を行っている。しかし後述するように、「島田黒谷1号墳」及び「島田黒谷2号墳」は調査の結果自然丘陵の高まりであることが判明した。これとは別に実施した試掘調査によって同一丘陵上及び斜面において弥生時代の墳墓群をはじめピット群、焼上坑群や赤生時代後期、奈良時代の包含層を検出したため、改めて当遺跡の名称を島田黒谷Ⅲ遺跡とし、北から5ヶ所の調査区を設定し約5ヶ月にわたって本調査を実施した。

調査は「1号墳」の掘り下げを開始し、やや遅れてII区の調査を開始した。II区においては段状遺構(SX01)、上坑2、積石状遺構、ピット群を検出したほか包含層中から弥生時代後期、古墳時代の土器を検出して8月末に調査を終了した。II区の調査と並行してI区の重機掘削を行い、引き続き8月23日から掘り下げを開始した。I区においては遺構は検出できず流土中より弥生後期土器、奈良時代後半～平安時代初期の須恵器を検出するにとどまり9月13日に調査を終了した。

9月16日からIV・V区及び「2号墳」の試掘調査を開始し10月13日から本調査を開始した。IV区ではピット1基のほか5世紀後半の須恵器群を検出し、V区においては箱式石棺1基を含む弥生時代後期末の墳墓4基を検出し11月8日に調査を終了した。III区は11月9日から重機掘削を開始し焼土坑3基等を検出し12月7日に調査を終了した。以下、各調査区の調査の概要について報告する。

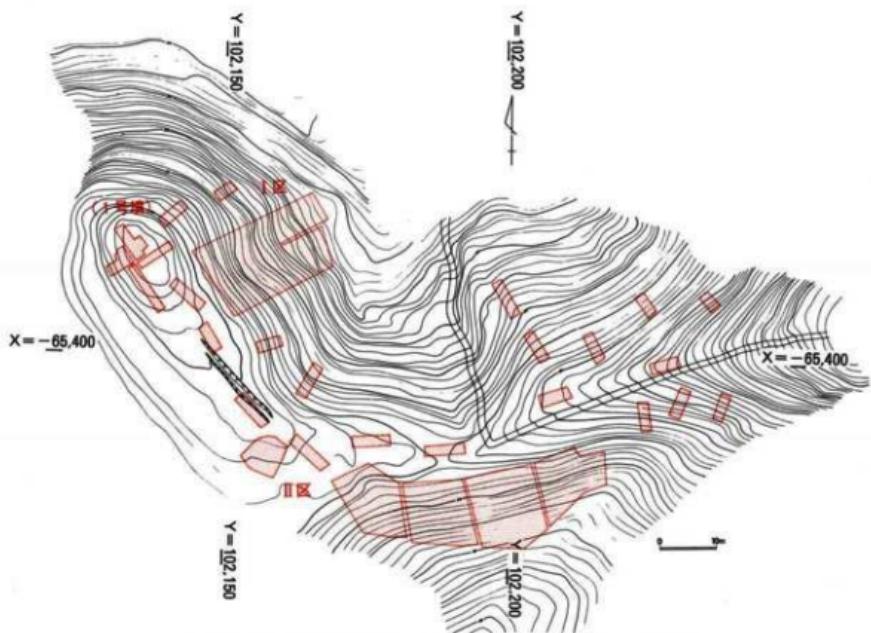
第2節 検出した遺構・遺物

(1) 島田黒谷「1号墳」の調査(第16図)

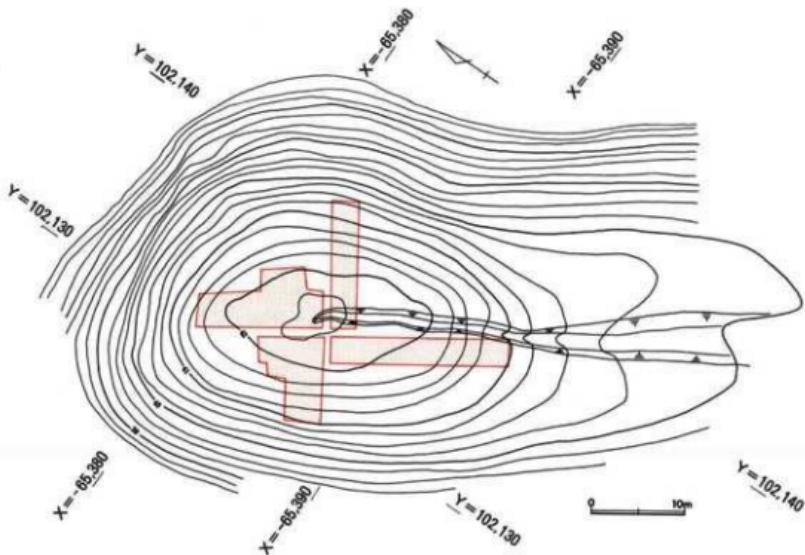
「1号墳」はI区の北西の標高約40m丘陵上先端部に位置し、調査前は長径約20m、短径10mの楕円形状を呈していた。調査は丘陵頂部を中心にトレンチを設定し掘り下げを行った。約30cmを取り除くと赤色及び黄白色の地山風化岩盤に達し、遺構及び遺物は検出されなかった。なお同一丘陵尾根上南側に設定した試掘トレンチでは近世以降に削平を受けたと思われる状況が確認されており、この「1号墳」は削平された後の残丘である可能性が高い。



第14図 島田黒谷Ⅲ遺跡 調査区配置図 S=1/2,000



第15図 島田黒谷Ⅲ遺跡I・II区調査区配置図 S=1/1,000



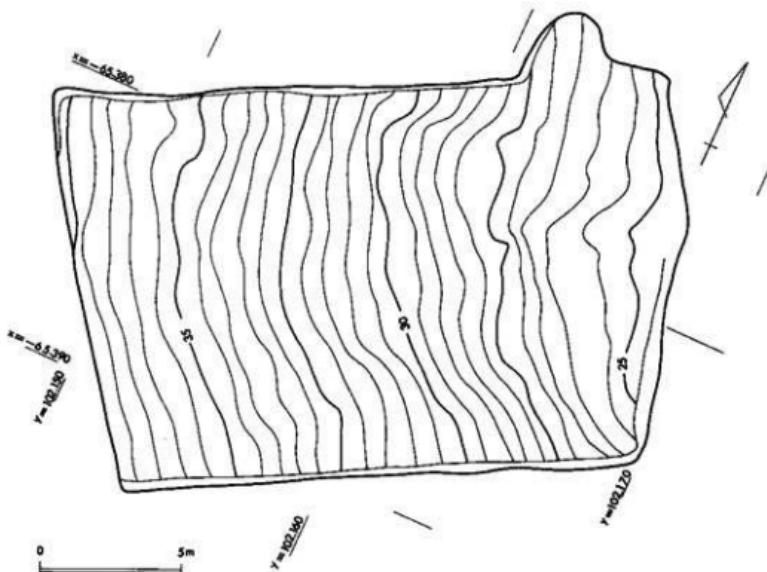
第16図 島田黒谷「1号墳」地形墳丘測量図 S=1/300

(2) I 区の調査 (第17図)

I 区は比較的急な丘陵北斜面に設定した約300m²の調査区である。調査前の地形はやや窪んだ地形を呈し横穴墓の存在が予想された地点である。試掘調査の結果横穴墓が存在する可能性は薄くなつたが、弥生土器等を検出したため本調査を実施した。

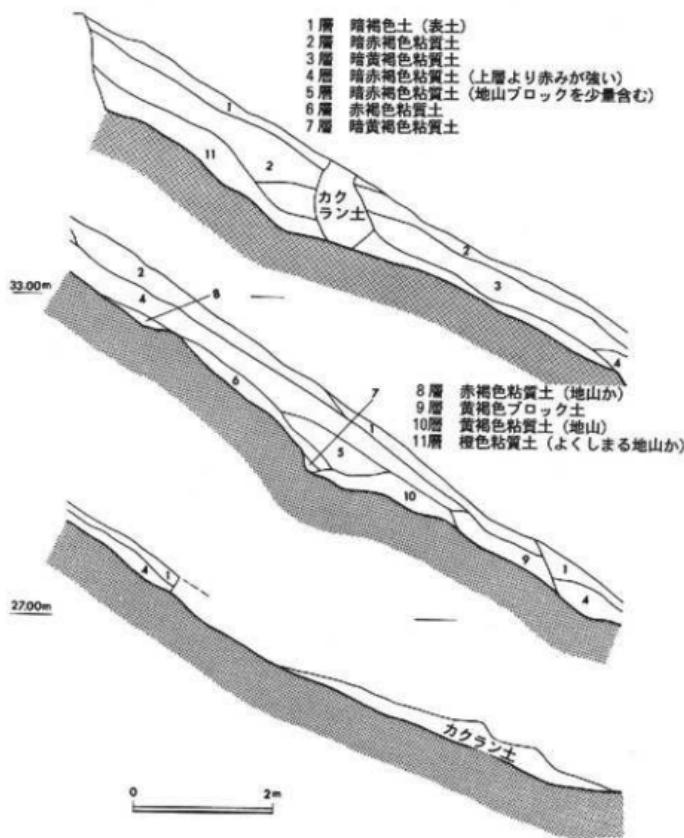
調査区はかなりの厚さで流上が堆積しており、北壁で厚さ約1 mで地山面に達し、中央部ではさらに深い。層序は橙色粘質土の上に暗黄褐色粘質土の堆積のち暗赤褐色粘質土が堆積している状況が認められた。遺物は主として2層(暗赤褐色粘質土)より出土していおり、上からの流れ込みと判断される。遺構については調査区東側にやや緩やかになる傾斜変換点があるものの明確な遺構は検出できなかった。

II区の出土遺物としては弥生土器・須恵器がある(第19図)。1は須恵器环の口縁部と思われ、2・3と同様なタイプであると思われる。口縁部が端部付近で外方に強く屈曲し、内面は稜をなす。端部は丸く收め内外面はヨコナデで仕上げる。淡青灰色を呈し、焼成は良好。



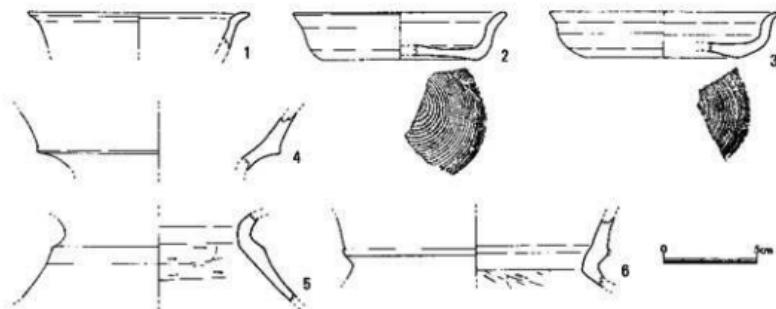
第17図 I区調査後地形測量図 S=1/200

39.00m



第18図 I区北壁土層図 S=1/80

2も口縁部が外反するタイプの須恵器坏である。器高は2.5cmと低く、底部と体部との境界は明瞭で、体部から口縁部にかけては内外面とも回転ナデ調整、口縁端部は丸く收め内面にかすかな稜をもつ。底部は回転糸切り後未調整。3も2と同様なタイプの須恵器坏であるが、口縁部の屈曲がきつく、屈曲部外面にややはっきりした稜が認められる。2と同様底部は糸切り後未調整。2は口径11.5cm、3は12.2cmを測る。1～3に似たタイプの須恵器坏は松江市四王寺跡^{〇〇}、石見国分寺^{〇〇}、松



第19図 I区出土土器 S=1/3

江市才ノ峠⁽¹⁾遺跡などで出土しており、四王寺跡の報告では8世紀後葉～9世紀後葉に位置付けられている。

4～6は弥生時代後期～古墳時代初頭の土器である。4は鼓形器台である。上台部に復元したが、表面の剥離が著しく正確な上下については不明である。5も同じく鼓形器台で筒部の縮約がやや進行したタイプと思われる。内面にかすかにヘラケズリが認められ、脚端部に向けて外反する。6は甕の口縁部である。小片であるため正確な口径は不明。やや厚手で口縁部は直線的に立ち上がり、屈曲部の横方向の稜は剥離の為失われている。

(3) II区の調査（第21図）

II区はI区の南約50mの南斜面と尾根上に位置し、調査区の面積は約600m²である。試掘調査の際に強く火を受けた段状構造等のほか弥生土器・須恵器を検出したため本調査を実施した。II区斜面の層序は、表土の下に厚さ約40cmの暗褐色粘質土が堆積し、その下の厚さ約20cmの暗赤褐色粘質土を挟んで地山に達する（第20図）。遺物は表土下の暗褐色粘質土から出土した。以下各遺構について記述する。

S X 0 1 (第22図)

調査区東端に位置する段状遺構である。幅5.7mにわたって花崗岩風化岩盤をL字状ににカットし、約5m×2mの平坦面を形成している。床面には一部段状になっているほかは柱穴等の施設は認められない。東側の壁面の一部は強く火を受け赤く焼けており、やや広い範囲にわたってタールが付着している。埋土には大きく分けて2層の炭層が確認でき、まず斜面を掘り込んだ直後に炭層が堆積し、上方から上砂が流れ込んだ後再度炭層が堆積している状況が観察された。従って少なくとも2度にわたって利用されたものと考えられる。遺物は出土しておらず、遺構の年代・性格につ

いては不明である。

S K 0 1 (第23図)

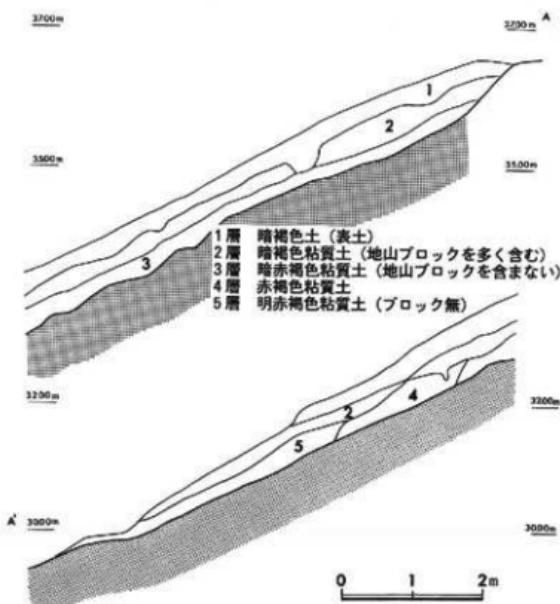
II区南斜面で検出した土坑である。平面形は $0.90m \times 0.55m$ の楕円形で、深さは0.1m程度と浅い皿状を呈する。地山よりやや上の2層中より掘り込まれ、底面は地山に達している。底面の一部は強く焼け、炭層の堆積がみられる。年代については掘り込み面である2層中より古墳時代以降の須恵器が出土しているため、それ以降につくられたものである。

S K 0 2 (第24図)

II区西側で検出した土坑で斜面に掘り込まれた $1.7m \times 1.7m$ の土坑で、深さは約0.25mを測る。遺物、炭などは全く検出されず、年代・性格については不明である。

尾根上ビット群 (第25図)

II区斜面部から約10m程1号墳寄りの尾根上に位置する調査区で、4基からなるビット群を検出した。II区斜面部との間は近世の削平を受けている。ビットは大形のもので径0.75m、深さ0.4m、小形のものは径0.35m、深さ0.3mを測る。ビット内の埋土は暗黄褐色粘質土及び暗褐色粘質土で



第20図 II区土層図 S=1/80

1～2層からなるが、柱穴痕などは確認できなかった。ビット群の周囲には2段の加工段が認められた。当構造は住居址的な性格をもつものと考えられるが、今回の調査区域内ではその構造を明確にすることはできなかった。遺物は両加工段間の平坦面地山直上から複合口縁の小片が1点のみ出土している。小片の上風化が著しく圓化していないが、おそらく弥生時代後期末頃のものと思われる。

S X 0 2 (第26図)

同じくII区尾根上で検出した積石状の遺構である。

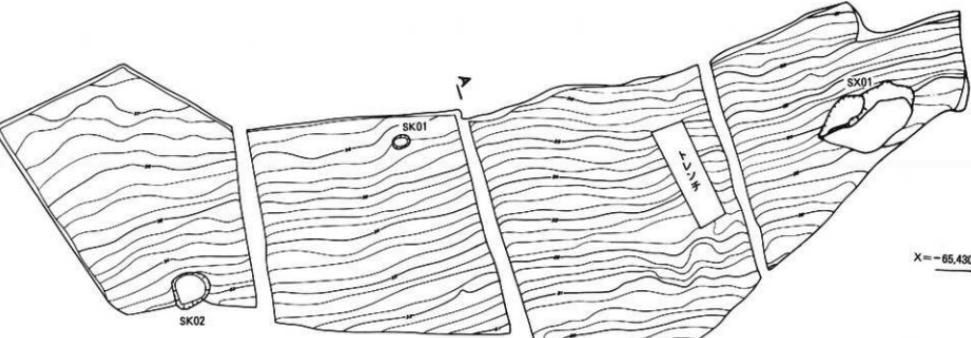
X = -65,410



Y = 102,180



X = -65,430



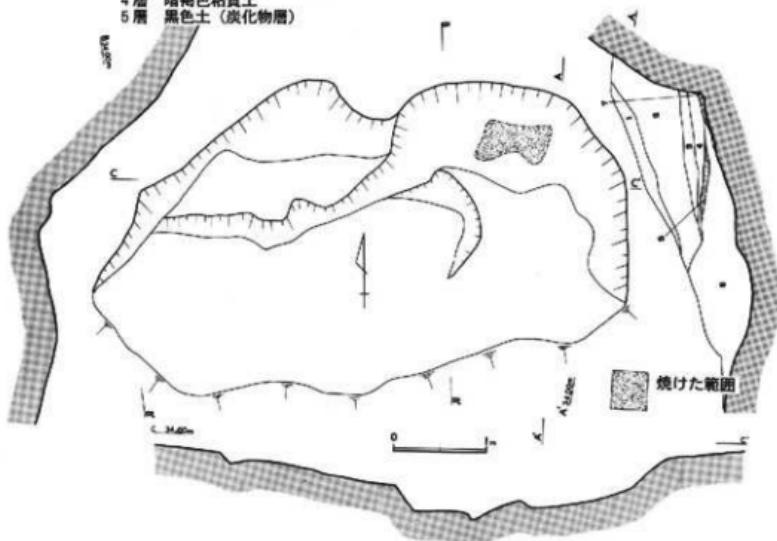
Y = 102,200

X = -65,410

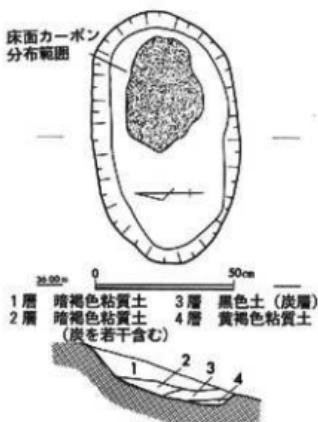
第21図 II区地形測量図

1層 灰褐色粘質土
 2層 黄褐色粘質土
 3層 黑色土(炭化物を若干含む)
 4層 暗褐色粘質土
 5層 黑色土(炭化物層)

6層 黄褐色粘質土
 7層 黑褐色粘質土



第22図 II区SX01実測図 $S = 1/60$



1層

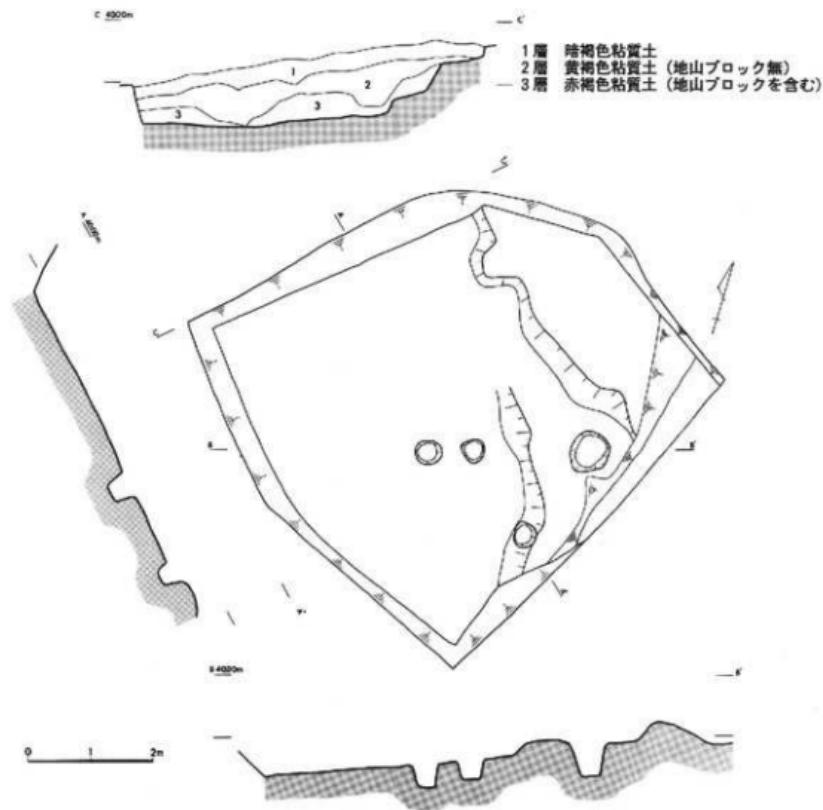
暗褐色粘質土
黄褐色砂質土

2層 赤色土(地山)

0

1m

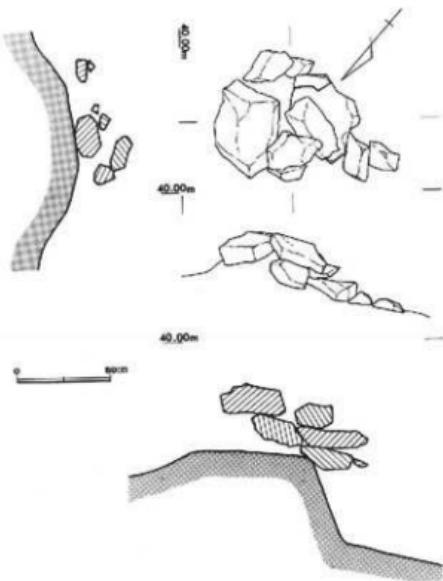
第24図 II区SK02実測図 $S = 1/40$



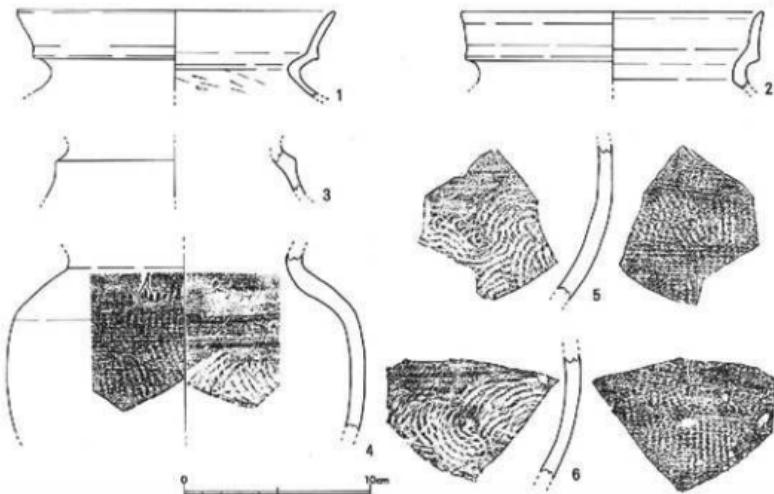
第25図 II区尾根上ピット群実測図 S=1/90

調査前の状況は、1.7m×1.4mの楕円形状の低い高まりを呈し、上半部の石材が露出していた。当初古墓の可能性を想定し調査を行ったが、積石の下はすぐ地山で墓壙等は確認されなかった。なお付近から近世以降の陶磁器類が出土しており、近年まで信仰の対象となっていたものと思われる。

II区からは前述のとおり弥生土器・須恵器が若干出土している(第27図)。いずれも流土中より出土したもので遺構に伴うものはない。1・2は弥生土器壺の口縁部で口縁端部はやや先細り状に収め屈曲部の稜は斜め下方向へ突出する。口縁部はヨコナデ調整で内面は頸部以下ヘラケズリを施す。3は鼓形器台である。下台部に復元したが風化が著しく調整がわからぬため正確な天地につ



第26図 II区SX02実測図 S=1/30



第27図 II区出土弥生土器・須恵器 S=1/3

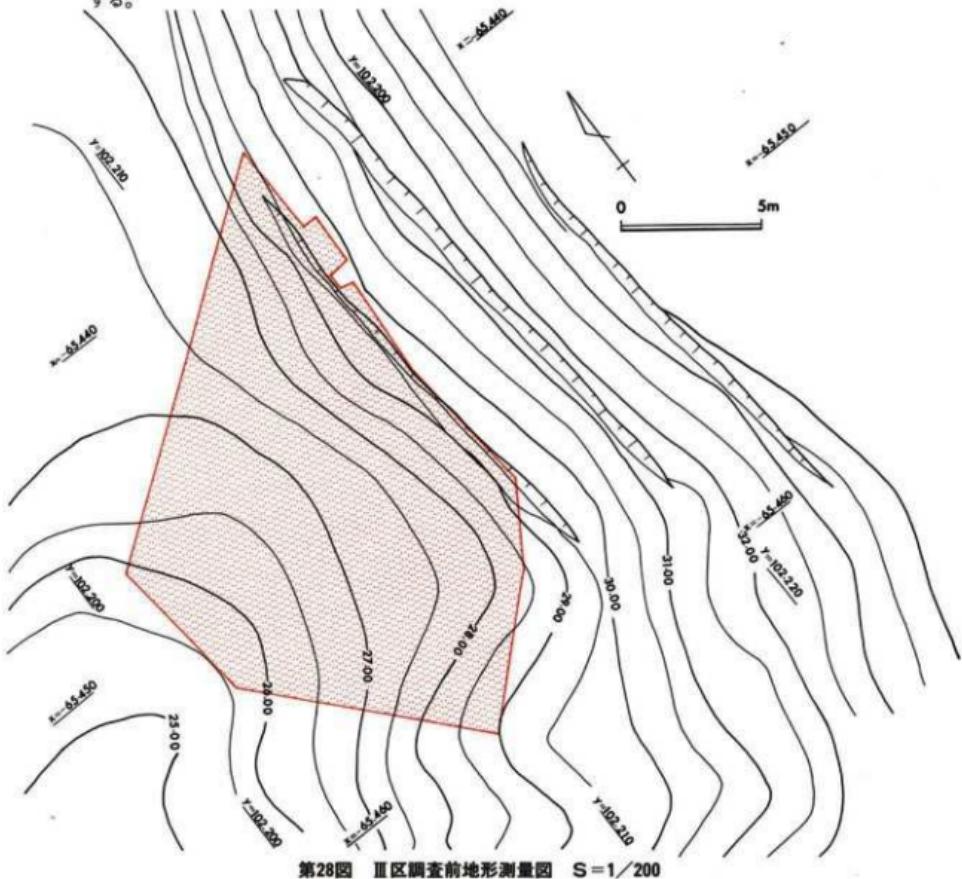
いては不明。1～3はその特徴から鍵尾A-5号墓式前後と思われる。

4～6は須恵器壺の肩部である。器形は肩はやや張るが稜は形成しないタイプのもので、外面は平行タタキのちカキメを施し頸部付近はヨコナデで仕上げる。内面は同心円文のち肩部上半部以上はヨコナデを施す。年代については肩部の特徴からみて6世紀末～7世紀末前後のものであろうか。

(4) III区の調査

Ⅲ区は谷を挟んでⅡ区の東側の南西方向に開けた比較的緩やかな斜面に位置する。調査前までは当地は植林地として利用されており、その際に段状に削平された部分が数ヶ所において認められた（第28図）。

Ⅲ区は試掘調査の際に須恵器片・焼土坑を検出し、本調査を実施したものである。本調査は11月22日より開始し、実働9日で約150m²にかけて調査を行い、自然流路と思われる溝1、焼土坑3のほか若干の繩文土器・弥生土器・須恵器を検出した。以下、各遺構・遺物についてその概要を記述する。



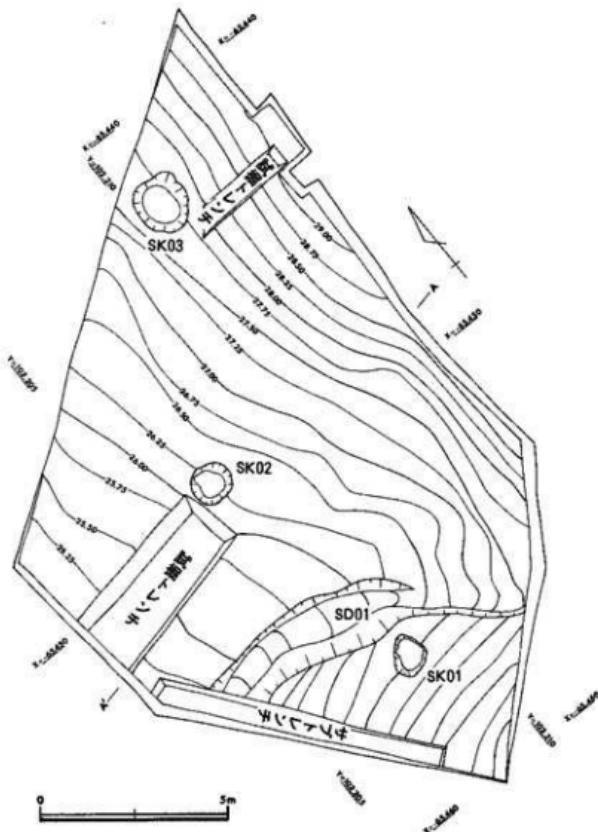
第28図 III区調査前地形測量図 S=1/200

基本層序（第30図）

当調査区の層序は表上下に約30cmの暗褐色粘質土が堆積し、その下に炭混じりの黒褐色粘質土が約20cm存在する。後述するSK02はこの土層中より掘り込まれている。その下には厚さ約20cmの淡黄褐色粘質土を挟んで炭を若干混じえる厚さ約20cmの暗褐色砂質土が堆積し、地山に達している。この炭混じりの暗褐色砂質土中から若干の縄文土器が出土している。

SD01（第31図）

調査区南側で検出した流路で、長さ約10m、幅は1.1m～1.8mを測る。深さは、下流の調査区西の南側局部から底部まで約80cmをはかり東側の上流部へ向けて次第に浅くなる。このSD01は、



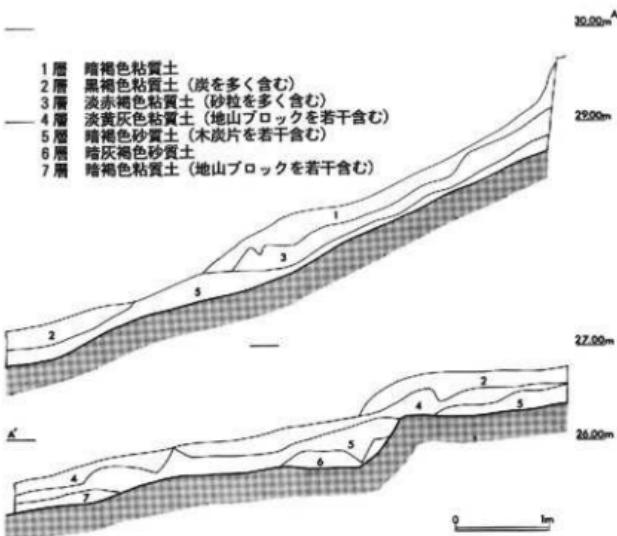
第29図 Ⅲ区遺構配置図 S=1/150

調査区内の谷底の最も深んだところに位置し、南側の比較的しっかりした地山に沿って湾曲している点から自然の流路である可能性が高い。

埋土は7層からなり、粘質土系の土層と砂質土系の土層が交互に堆積しており、数度の出水によって堆積したものと想定される。遺物は3層のオリーブ色砂質粘土中より縄文時代の粗製土器が、1層直上の暗褐色土中より弥生土器の底部が出土している。

SK01（第32図）

調査区南側のSD01に隣接するところ



第30図 Ⅲ区土層図 S=1/60

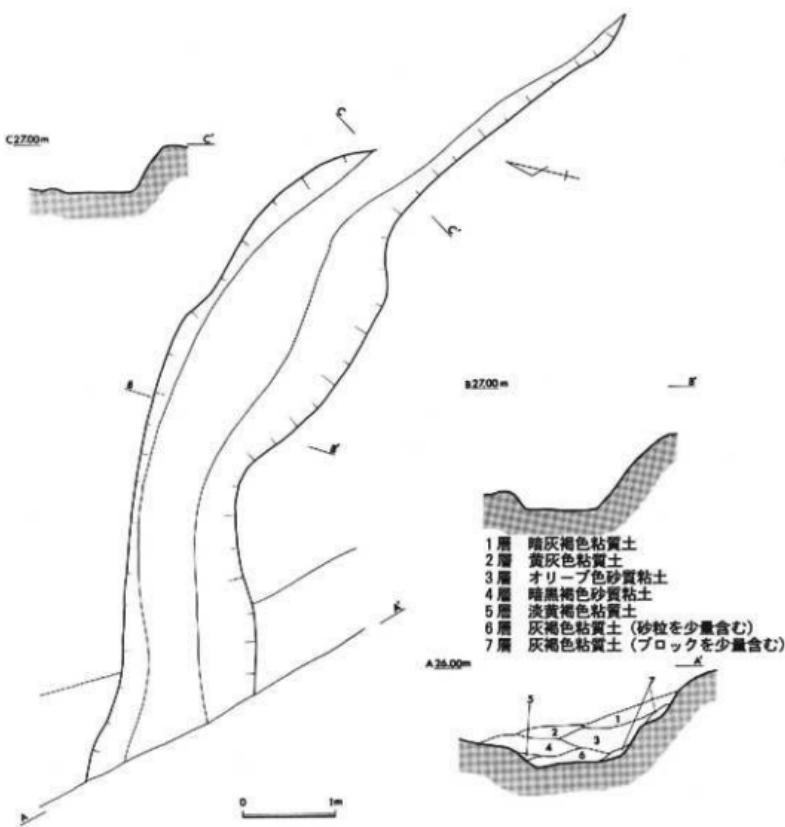
で検出した焼土坑である。SD01を覆う暗褐色砂質土（5層）より掘り込まれ、底面は地山に達している。平面形は $0.9\text{m} \times 1.1\text{m}$ の不整形な楕円形を呈し、深さは約15cmと浅く皿状の断面形の形状をなす。床面には径約10cmの小ビットが3基存在する。南西側の側壁は強く熱を受け赤く変色している。埋土は6層からなり、炭・焼土を含む黒褐色粘質土が多量に認められた。遺物は出土せず、年代を特定することはできないが、層位的にみてSD01より新しいものであると言える。

SK02 (第32図)

調査区中央部付近で検出した焼土坑で、前述のとおり2層の黒褐色粘質土中より掘り込まれている。平面形は径1.1mのいびつな円形プランのもので、深さは約20cmとSK01と同様比較的浅いものである。東側及び北側側壁の一部は赤く焼けている。埋土は4層からなり最下層の4層は焼土・炭を多量に含む黒色粘質土で比較的厚く堆積している。SK01と同じく遺物は出土せず、年代については不明である。

SK03 (第32図)

調査区北側で検出した焼土坑で、表土直下の面でプランを確認した。平面形は約 $1.6\text{m} \times 1.4\text{m}$ の楕円形状を呈し、今回検出した焼土坑の中では最も大きなものである。土坑東側側壁に小さなテラス状平坦面が2つ認められる。焼土面は他の2基の焼土坑よりかなり広い範囲にわたって認めら



第31図 III区SD 01実測図 S=1/60

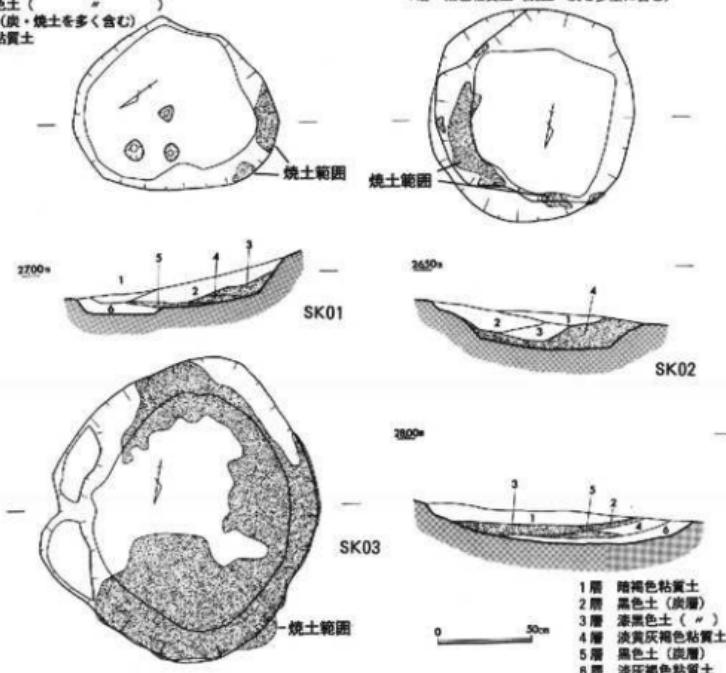
れた。深さは約20cm前後と他の焼土坑と同様浅いもので皿状の断面形をなす。埋土は6層確認でき、このうち焼土・炭を多量に含んだ層は3層あり、レンズ状に堆積している。遺物は全く出土せず、年代を特定することはできないが、掘り込み面がかなり浅い点が注意される。

III区出土遺物（第33図）

III区からは縄文土器・弥生土器・須恵器が出土している。1は縄文の粗製土器で内外面とも粗いナテ調整を施す。砂粒を多量に含み、焼成はやや不良。2は須恵器壺の胸部片で外面は比較的細い

- 1層 淡褐色粘質土
- 2層 黒褐色粘質土
- 3層 黑褐色粘質土(炭・焼土を多く含む)
- 4層 暗黒褐色土(“”)
- 5層 黒色土(炭・焼土を多く含む)
- 6層 黄褐色粘質土

- 1層 淡褐色粘質土
- 2層 黑褐色土
- 3層 黑灰褐色土(焼土・炭を若干混じる)
- 4層 黑色粘質土(焼土・炭を多量に含む)



第32図 III区SK01・02・03実測図 S=1/30

原体によるタタキ、内面に当て具痕がみられる。3
は弥生土器の底部と思われる。平底のもので色調は
淡褐色を呈し、調整は摩滅の為不明。

今回検出した焼土坑群は時期を特定する遺物等が
なく、年代については明言できないが、掘り込み面
からみてかなり新しい時期のものと思われる。炭を
多量に含む点や規模・形態が比較的類似する例とし
て近世以降の小炭をつくる際に掘り込まれる土坑に類似するものがあり、当調査区の例に類似する
ものは近辺の遺跡でも幾つか確認されている。これらを一律に論することはできないにせよ、出土
した炭の理化学的分析も踏まえてその性格について再検討する必要があると思われる。



第33図 III区出土土器 S=1/3

(5) 島田黒谷「2号墳」の調査（第35・36図）

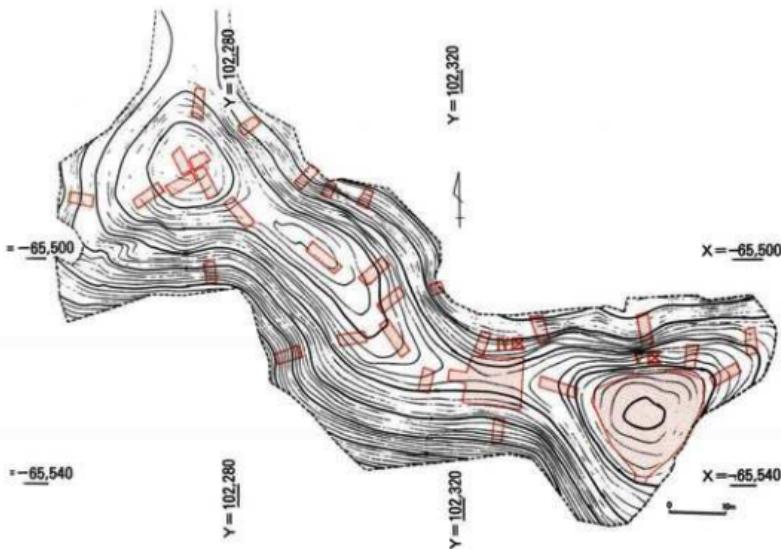
島田黒谷「2号墳」は「1号墳」より約170m南東の丘陵尾根状に位置し、南東側に向かってIV区、V区に続く尾根が派生している。最高点は約64mを測り、島田黒谷Ⅲ遺跡内では最も高い尾根の頂上部にあたる。当初表面観察では径約20m程度の円墳もしくは前方部を南東に向けた全長45m程度の前方後円墳の可能性が想定された（第35図）。調査は「1号墳」と同様に頂上部に十字形のトレンチを設定し掘り下げを行ったが、表土である腐食土を取り除くと黄白色・暗黄褐色の地山岩盤が露出し、盛土もしくは墓壇らしきものは全く検出できなかった（第36図）。よって「1号墳」と同様、当古墳も自然の尾根上の瘤であると判断し調査を終了した。

(6) IV区の調査

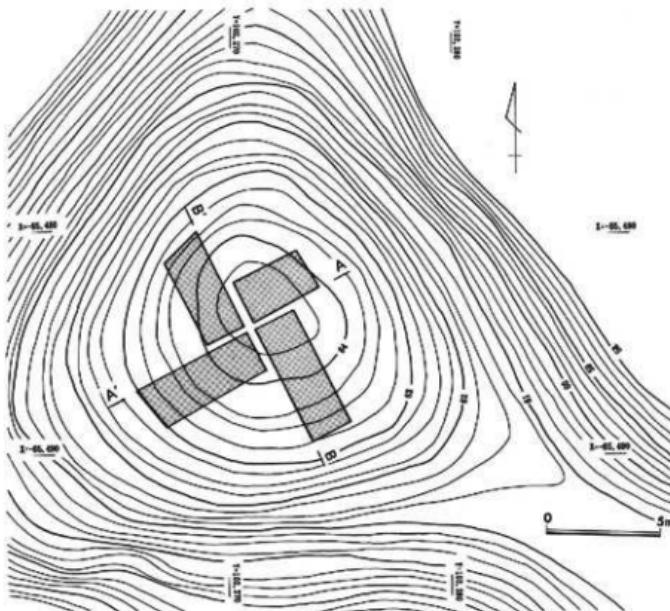
IV区は「2号墳」の南東約60mの尾根上鞍部に位置する（第34図）。試掘調査によって須恵器を含む包含層が検出されたため、約100m²の範囲にわたって調査を実施した。

層序は表土下にやや明るい暗褐色粘質土（B-B' 2層）が約20cm堆積し、その下の約30cm程度の暗褐色粘質土を挟んで地山に達する（第38図）。このうち須恵器は3層中の、地山から若干浮いた付近から出土した。

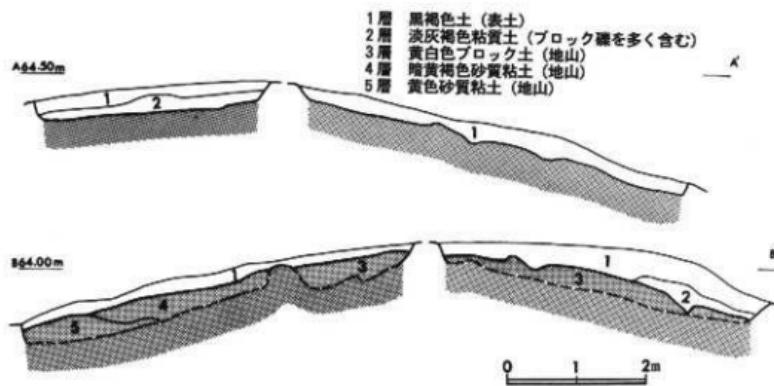
須恵器は尾根上の比較的緩やかになっているところを中心に集中して出土している（第37図）。



第34図 IV・V区調査区およびトレンチ配置図 S=1/1,000

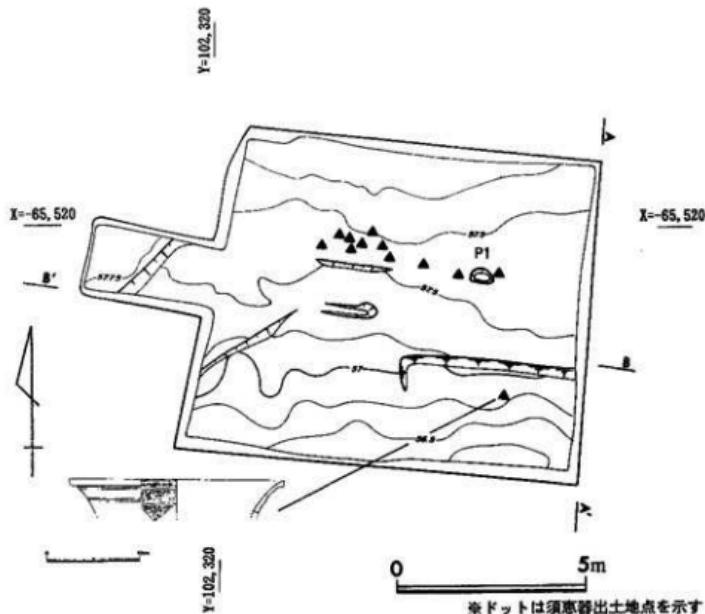


第35図 島田黒谷「2号墳」トレンチ配置図 S=1/250



第36図 島田黒谷「2号墳」土層図 S=1/80

尾根上であるという地形的制約から他の流れ込みといった状況は考え難く、比較的原位置に近い状況であると思われるが、遺構としてはピット1基と若干の加工段を検出したのみで、住居址等は検出されなかった。須恵器は大部分は大甕の口縁部・胴部でかなり小さい細片として出土してお



第37図 IV区地形測量図・遺物出土状況図 S=1/150

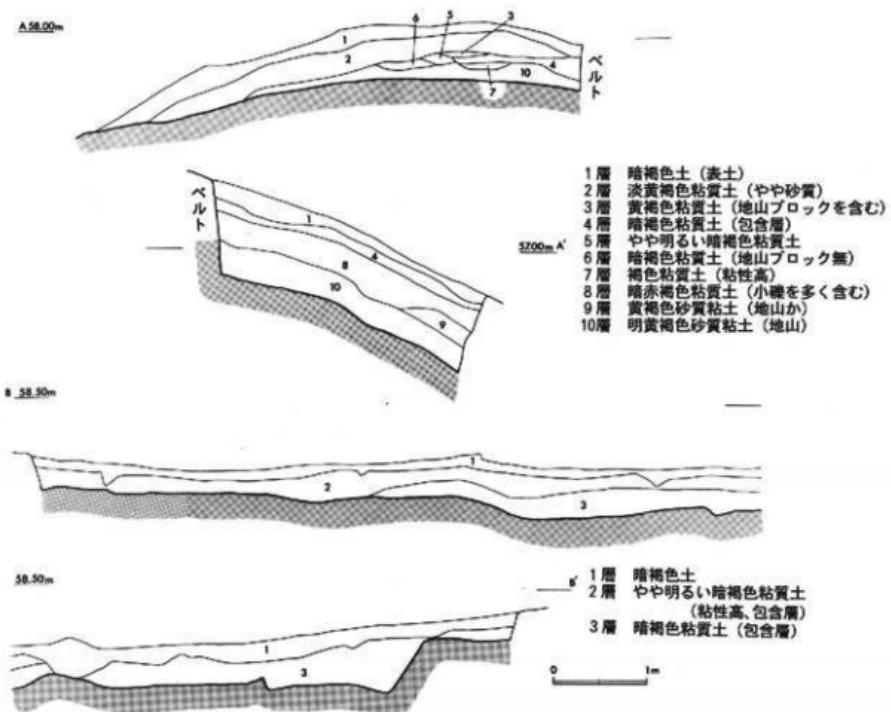
り、意図的に破碎されて散布された可能性も考えられる。

第1ピット（第39図）

丘陵尾根上の調査区のやや北より付近で検出したピットで、前述の須恵器散布範囲の北限にあたる。0.7m×0.4mの椭円形プランのピットで、深さは約20cmと浅い。埋土は3層からなり、上から暗褐色粘質土、暗黒褐色粘質土、黄橙色粘質土の順で堆積している。遺物は出土しておらず、焼土・炭等も認められない。当調査区内においてはピットはこの1基しか検出されず、その性格・年代については不明と言わざるをえないが、位置関係からみて前述の須恵器群と何らかの関連をもつものであったと想定される。

IV区出土遺物（第40図）

IV区から出土した遺物は須恵器のみで年代的にも限定されるものである。1は大甕の口縁部で他の須恵器群とはやや離れた調査区東南部から出土したものである（第37図）。口径の約6分の1残存し、色調は2～5の他の須恵器大甕口縁部とはやや異なる。口縁部は大きく外反し、端部外面は



第38図 IV区土層図 S=1/60

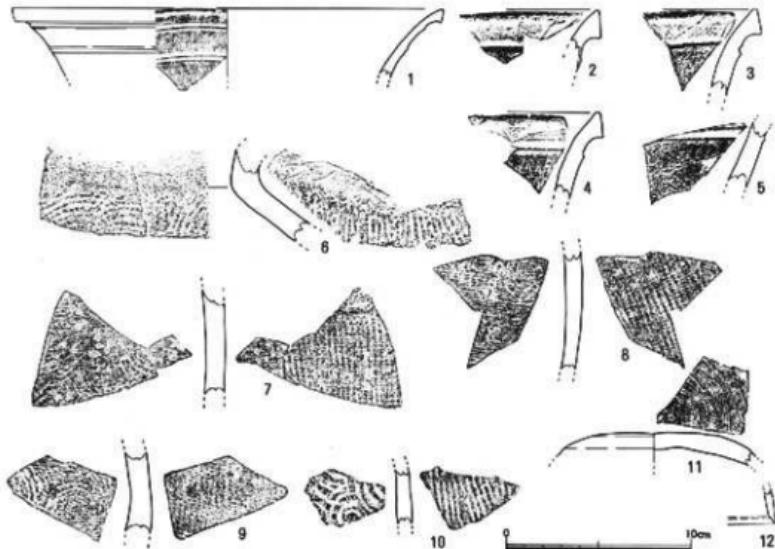
断面三角形状の形状をなし、斜め下方向へ突出する。口縁部下には2条の凹線文風の沈線と細い突帯がセットで2段に巡り、その間は比較的振幅が大きくピッチの狭い12本単位の樹脂波状文で充填されている。口縁部内面は稜などをもたず平坦でヨコナデで仕上げてある。胎土は緻密で色調は淡青灰褐色を呈する。

2～5も1と同様大甕の口縁部・頸部の破片で、色調・胎土からみて同一個体である可能性が高い。口縁部外面は断面三角形状の形状をなし、口縁部下に細い突帯と沈線がめぐる。胎土は若干砂粒を含み色調は淡緑灰色を呈し一部自然釉が認められる。

6は同じく大甕の頸部である。外面は平行タタキ、内面は頸部屈曲部以下は同心円文が認められる。色調・胎土は2～5の口縁部の資料と類似し、同一個体の可能性が高い。



第39図 P1 実測図 S=1/30
IV区出土の須恵器は大甕の口縁部の形状や同じく大甕胴部内面の同心円文スリ消し技法の存在、坏蓋の特徴からみてほぼ同一時期のものとされる。こうした特徴をもつ須恵器は当調査区の北約100mの門生古窯址群高畠支群やV区を挟んで約150m東に位置する同古窯址群山根支群出土のものと一致し、どちらかの窯跡で生産された製品であると考えられる。



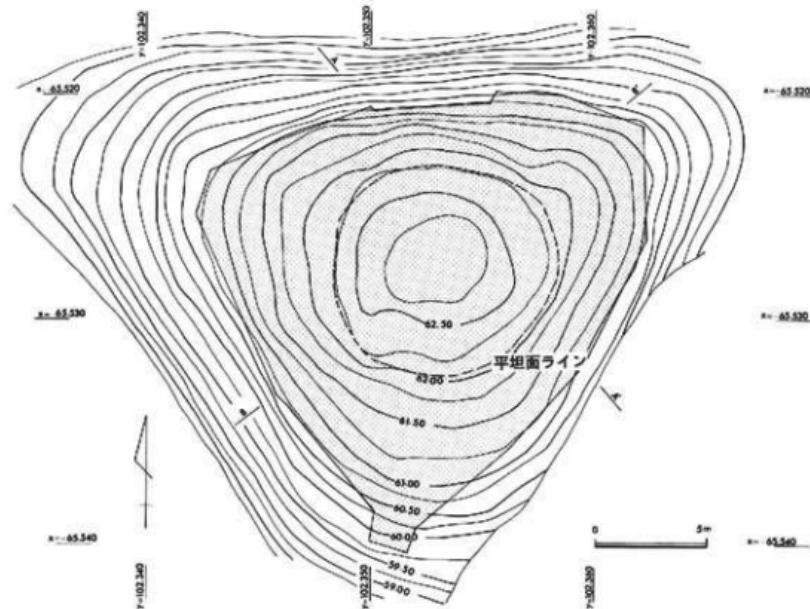
第40図 IV区出土須恵器 S=1/3

(7) V区の調査

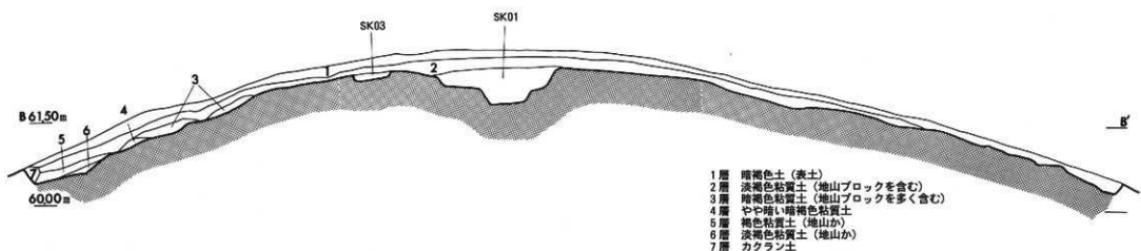
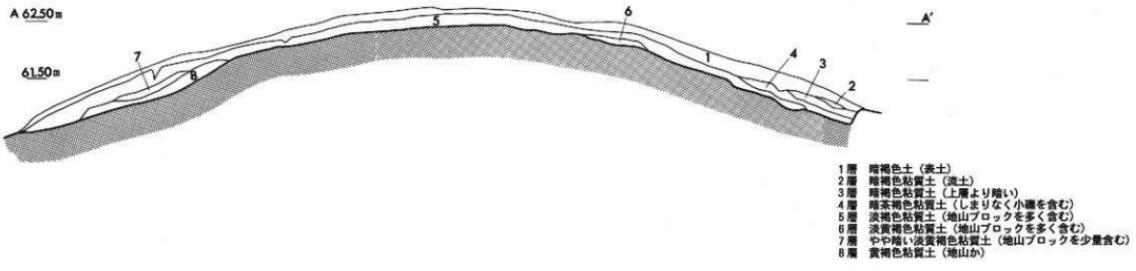
V区はIV区の東側に隣接する尾根頂部に位置し、最高点は約62.8mを測り当遺跡内においては「2号墳」に次いで高い地点に位置する。調査前には尾根頂部に径10m程のやや広い平坦面が認められた(第41図)。試掘調査の際に尾根頂部平坦面から後述するSK01の供献土器群を検出したため約170m²にかけて調査を実施し、木棺墓(土壙墓)3基、箱式石棺1基を検出した。

基本層序(第42図)

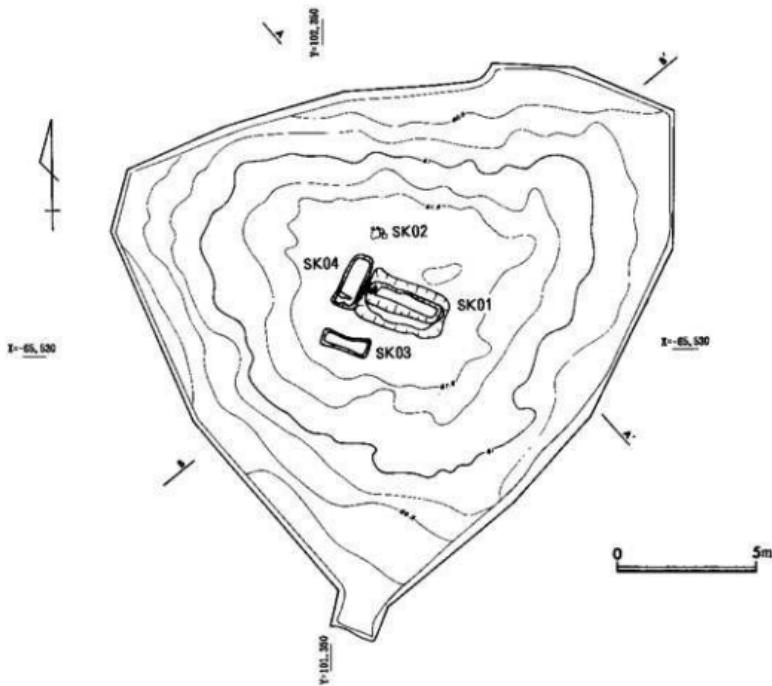
遺構の検出面は極めて浅く、表土から約20cm下の黄白色ブロック土の地山面において各遺構を検出した。表土と地山の間には厚さ約10cmの淡褐色粘質土が存在するのみである。当初墳丘墓ないしは方形区画墓の可能性も想定され、盛土・溝などの有無について精査を行ったが、そうした痕跡は一切見い出せなかった。ただ後述するようにSK03の深さが極めて浅い点からみて、墳墓を築造する際に地山を一定の広さで削平して整地し、その上に若干の盛土を施した後その上面から墓壙を掘り込んだ可能性も想定される。ただしその後その盛土部分が流出してしまったのか、もしくは地山に直接墓壙を掘り込み、その後地山の上面が自然に洗い流され現在のような形になってしまったものなのかどうかについては現状では判断できない。



第41図 V区調査前測量図 S=1/250



第42図 V区土層図



第43図 V区遺構配置図 S=1/200

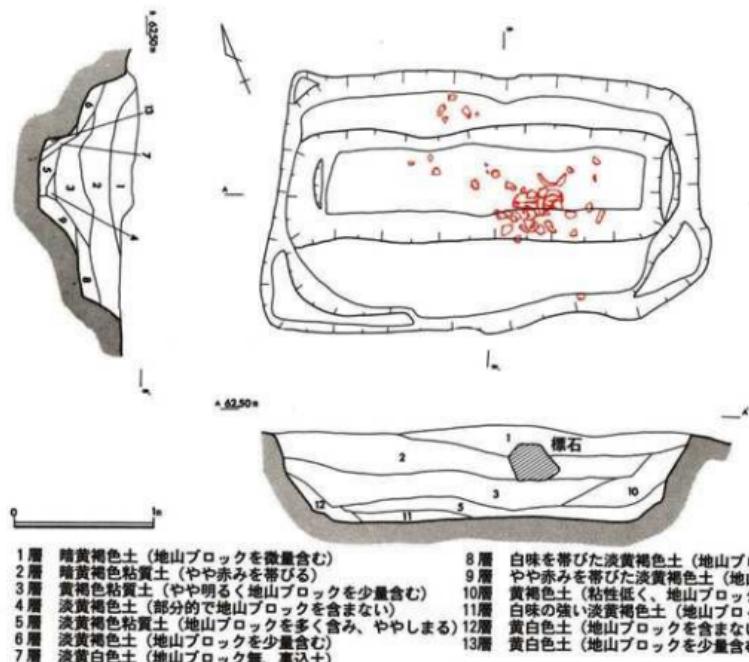
遺構配列状況（第43図）

遺構はいずれも丘陵頂部の約6m×5mの平坦面においてのみ検出し、丘陵斜面からは検出されていない。遺構は最も人形で二段掘りの墓壙をもつSK01が中央に配され、その西側にSK04がほとんど接するような形で位置し、SK02とSK03がやや離れてそれぞれ北西・南西に位置する。

各主体部の主軸は、SK01・02・03がN-68°～81°-W前後を指向するのに対して、SK04のみがN-25°-Eと他の主体部と直交する形で位置している事実は、この主体部の性格を考えるうえで興味深い。これらの土体部は直接的な切り合い関係をもたず、各主体部の前後関係については一切不明であるが、比較的短期間に連続して営まれたものと想定される。

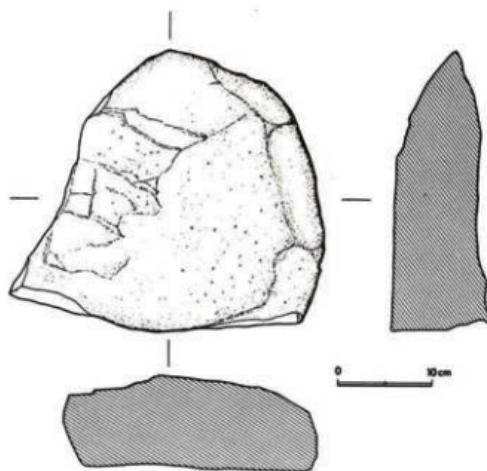
SK01（第44図）

丘陵頂部平坦面中央部に位置し、本墳墓群の中心的な存在である。墓壙は2段掘りで、墓壙1段目の掘り方は長軸3.0m～3.15m、短軸1.65m～1.8m、深さ25cm～40cmを測り、かなり大形のもの

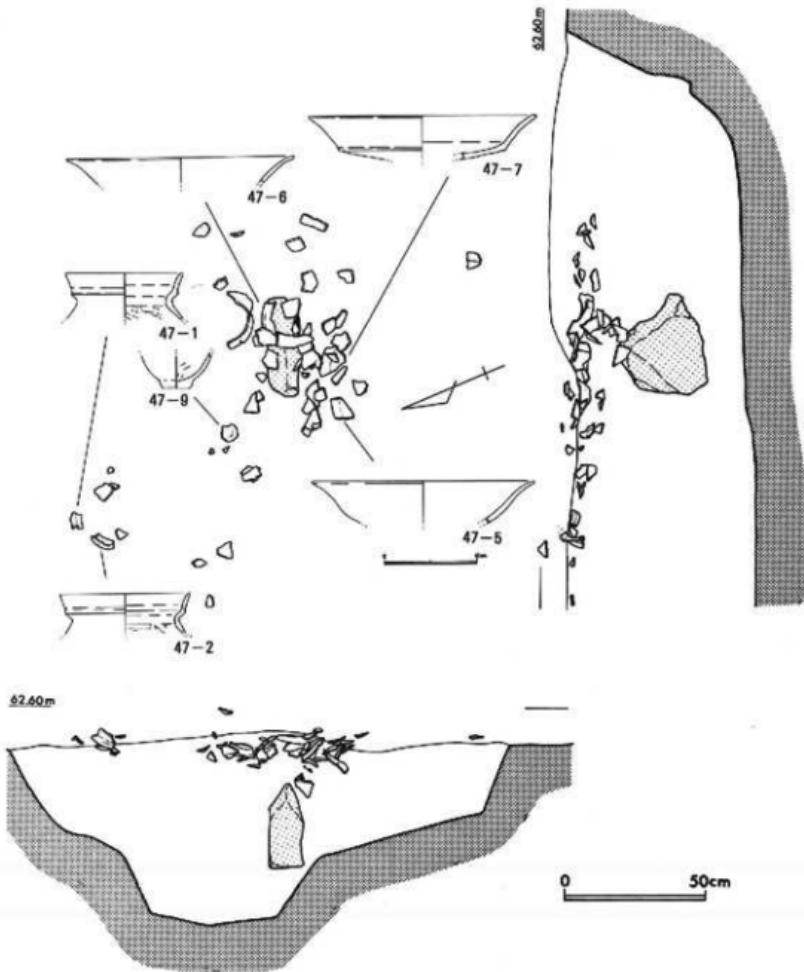


第44図 V区SK01実測図 S=1/40

である。1段目の掘り方底面は15cm～55cmの幅で長軸側に巡っているが、小口側には存在しない。2段目掘り方は長軸2.7m、短軸0.8m、深さ30cmを測る。床面はほぼ平坦で5cmほど東側が高い。埋土は淡黄褐色及び黄褐色土系の土が中央へ向かって落ち込んでいる様子が観察された。2段目掘り方内には地山ブロックを含まない黄白色土が壁に沿うようにして認められ、木棺を固定する際の裏込め土であると思われ、木棺の規模は2.1m×0.5m程度と推定される。なお両小口側にはL字にカットし

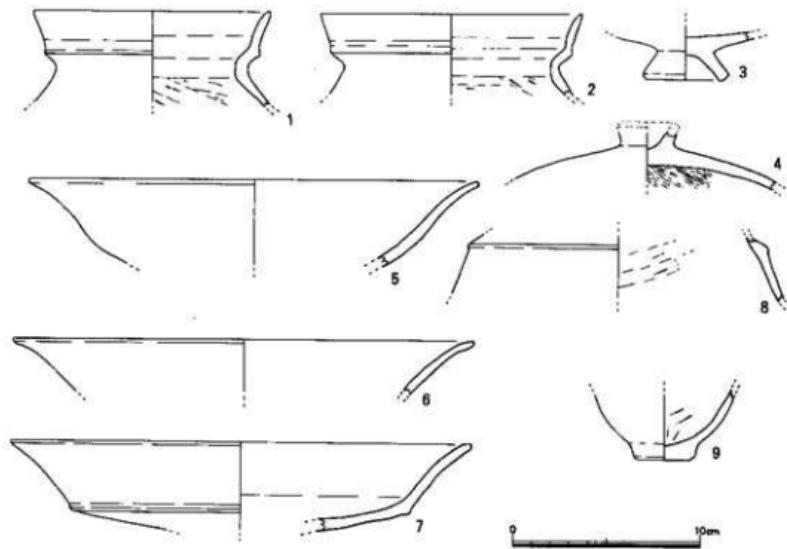


第45図 V区SK01標石 S=1/6



第46図 V区SK01供献土器出土状況図 S=1/20

て形成された平坦面が認められた。供献土器群は墓壙中心部からやや東寄りで集中して検出されたが、墓壙中央北側にも甕を中心とする小グループがある（第46図）。検出レベルは1段目掘り方上面あたりに集中していたが、中央部はやや落ち込んでいる。供献土器の配列状況は土器群がかなり風化によって細片化しており明確に捉えられなかった。土器群の直下には標石と思われる扁平な河原石が直立した状態で検出された。出土状況からみておそらく木棺が腐朽した際に落ち込んだもの

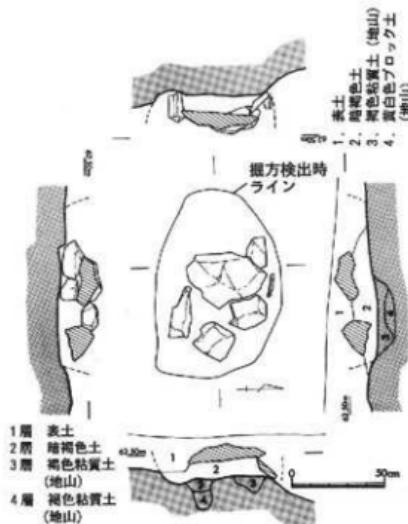


第47図 V区SK01出土土器 S=1/3

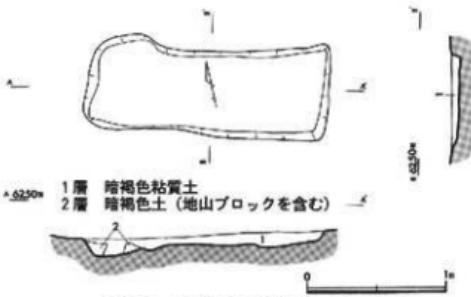
と推定される。

第47図はSK01出土土器である。いずれも風化が著しく細片化しており、全体を復元する資料はない。1・2は甌の口縁部である。口縁部をヨコナデで仕上げるタイプで、器壁はやや厚く、口縁部は緩やかなカーブを描いて外反し端部は先細り状を呈する。口縁屈曲部は明瞭ではないが斜め下方に向へ突出気味となる。頸部以下はヘラケズリを施す。3は低脚甌及び蓋形土器と思われる。4は内面を磨いており低脚甌とも考えられるが、低脚甌とした場合他の土器群とやや年代的なズレが生じるため、蓋形土器として復元した。5は高脚の甌部で、稜をもたず屈曲し緩やかに外反するタイプ。風化の為調整は不明。6はやや大形の高脚甌である。7も同じく高脚甌であるが、屈曲部が稜をなして外反するタイプで、当該期の出雲地方では類例の少ないものである。稜の部分はやや突堤状となっている。8は鼓形器台と思われるが、風化が著しく正確な天地については不明。9は小形の甌もしくは甌の底部である。小さいが突出した明確な平底をもつ。

SK01から十器群の他に標石と思われる河原石を検出した(第45図)。30cm×32cmで厚さ9cmの扁平な河原石で特に加工痕等はみられないが、全体的に風化が進んでいる中で、直立して出土した際の底面部分のみ風化があまり進んでいない点が注意される。



第48図 V区SK02実測図 S=1/30



第49図 V区SK03実測図 S=1/40

ものと考えられ、プランは $1.7m \times 0.6m$ の長方形を呈し、深さは約10cmと極めて浅い。床面は、現状では東側が高くなっているが、これは西側が木の根による擾乱を受けているためで、東小口側と西小口側とのレベル差については不明である。埋土は暗褐色粘質土であるが、前述の擾乱を受けているため、木棺の裏込め土等は確認することができなかった。またこの主体部からは遺物は全く出土していない。

既に述べたとおり、このSK03の本来の掘り込み面は今回の検出面よりかなり高いところにあったものと想定されるが、それが盛上を施しその上面から掘り込まれたものか、もしくは地山を整地し直接掘り込まれたものであるかどうかについては不明と言わざるをえない。

SK02 (第48図)

丘陵頂部平坦面北端で検出した小形の箱式石棺で、すぐ北側は急な斜面となって落ち込んでいる。こうした位置的条件からかなりの部分はすでに流出しており、蓋石と思われる石材の一部が斜面下部の試掘トレンチから発見されている。掘り方はほとんど墓壙底面付近で検出し、 $1.0m \times 0.65m$ を測る。北側に2個、南側に1個側石と思われる石材が残存し、その上に蓋石と思われる $25cm \sim 45cm$ 程の河原石が3個残存しているが、やや原位置を動いているものと考えられる。棺内の中は幅約40cm、長さは不明。棺内には、既に土が流入しており、遺物は検出されなかった。石蓋土壙墓の可能性も考えられ

るが、側石状の石が示す主軸の方向がSK01、SK03の主軸方向とほぼ一致することから箱式石棺の可能性が高いと考えられ、その規模からみて小児用のものであったと推定される。

SK03 (第49図)

丘陵頂部平坦面南端で検出した主体部である。墓壙は1段掘りの

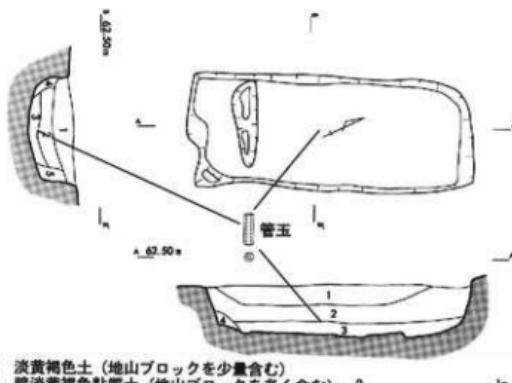
SK04 (第50図)

SK01の西側にほとんど接するような状況で検出した主体部で、先に述べたとおり他の主体部とは主軸をほぼ直交させて位置している。

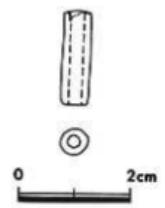
1段掘りの木棺墓で、プランは長方形を呈し規模は2.0m×0.8m、深さ0.35mを測り、壁は垂直に近い状態で掘り込まれている。床面はほぼ平坦であるが、若干北側が高くなっている。

床面南側には0.6m×0.1m～0.2m程の浅い落ち込みが確認された。小口溝の可能性も考えられるが、やや浅い点、北側に対応する明確な溝が確認できなかったことからその可能性を指摘するに留めておく。埋土は基本的に3層からなり、上から淡黄褐色土(1層)、暗淡黄褐色粘質土(2層)、淡黄白色土(3層)の順で若干中央へ落ち込むような形で堆積している。また部分的ではあるが、壁沿いに墓壙中央部とはやや異なる土層(4・5層)が垂直気味に立ち上がる形で確認され、おそらく木棺を固定する際の裏込め土であったと推定される。

遺物は墓壙ほぼ中央部の床面から若干浮いた2層と3層との境界付近から管玉が1点出土した。(第51図)。管玉は長さ1.7cm、幅0.5cmで径約3mmの孔を両側から穿孔している。石材は緑色凝灰岩製と思われ、材質は軟質で風化が進行しており、色調は淡緑色を呈する。



第50図 V区SK04実測図 S=1/40



第51図 V区SK04出土管玉

第3節 小結 －V区弥生時代墳墓群を中心に－

今回の島田黒谷Ⅲ遺跡の調査においてはV区で弥生時代後期末と思われる4基からなる墳墓群を検出した。以下、今回知り得たことをもとに若干の問題点を指摘してまとめとしたい。

1・木棺墓の構造について

今回検出した墳墓群のうち、木棺墓と推定されるのはSK01とSK04である。SK01は2段目の掘り方中に裏込め土と思われる上層が確認された点、供獻土器群・標石が木棺の腐朽により陥没した様相を呈していた点からみて、木棺墓としてほぼ間違いないと思われる。SK04も同様に裏込め土の存在や、やや問題はあるものの小口穴らしい床面の溝のあり方からみて木棺墓の可能性が高い。安来平野における弥生時代の墓制についてはかなり早い段階から一般に「土壙墓」と呼称される墓制が主流を占めていたことが明らかにされており、その中には木棺墓も含まれている。⁽²⁰⁾その後当地域で検出された同様な墳墓も一括して「土壙墓」と呼称されているが、その中には明らかに木棺墓のものも含まれ、両者をどのように区別もしくは定義づけるのかが今後問題になってくると思われる。

SK01の木棺形態については木棺が腐朽してしまっているために知るよしもないが、同様な2段掘りの墓壙を呈する安来小谷土壙墓では木棺の一部が残存していて組合せ式箱形木棺であったことが知られており、同様なタイプであった可能性が高い。⁽²¹⁾弥生時代の組合せ式箱形木棺については福永伸哉氏の研究があり、それによれば墓壙床面の短辺部に小口穴を設けるI型と底板の上に小口板を立てるII型、墓壙壁の四隅に切れ込みを設け棺材を固定するIII型に分類されている。⁽²²⁾SK01の場合はII型もしくはIII型に該当する。出雲地方における木棺墓を検討した場合、II型もしくはIII型が殆どを占め、明確な小口穴をもつI型は松江市友田遺跡で目立つ程度で、友田遺跡例も他のものと比較するとやや時期的には遅るものである。一方鳥取県ではI型の木棺は各遺跡で普遍的に見出され、同じ山陰でも際立った違いを見せる。⁽²³⁾こうした点を考慮した場合、SK01は出雲地方では当該期における普遍的な木棺墓として位置付けて大過ないと考えられる。

これに対しSK04は片側小口にのみ小口穴らしい溝をもつもので、他にあまり例を見ないものであり、これをI型木棺として認識するにはなお躊躇される。しかし、当遺跡の西約2.5kmに所在する中山遺跡においては同様な片側にのみ小口穴をもつ「土壙墓」が2基検出されており、こうしたタイプが当地域においてI型木棺のローカルな形態として捉えられる可能性がある。

先に引用した福永氏の研究によれば、木棺型式の差はその被葬者の出自の違いを示し、少数派が他地域からの移入者である可能性が高いことを指摘している。当遺跡の木棺墓群に当てはめた場合、I型木棺の可能性があるSK04のみが主軸を他の主体部とは直交させている点が注意を引く。また先に触れた中山遺跡の小口穴をもつ2基の「土壙墓」も他の3基の「土壙墓」とは主軸を異にして

いる。埋葬頭位が集団の出自の違いを示す可能性がある点は弥生時代の墓制研究においてしばしば指摘されるところであり、こうした点を考慮した場合、このSK04の被葬者が他地域からの移入者であった可能性も考えられる。ただ、こうした社会組織論・集団関係論を現在の段階で論ずるにはなお無理があり、まず当該期の木棺型式及び頭位方向についての整理を他地域の例と比較しつつ改めて整理検討する必要がある。

2・箱式石棺について

今回検出したSK02はかなりの部分が既に流出しており、箱式石棺であるといった確証はないが、既に触れたように側石状の石の示す主軸方向からみてその可能性は高い。

出雲地方における箱式石棺で弥生時代と明確に言えるものは意外に少なく、近辺の例としては安来市仲仙寺9号墓の3基、同10号墓の2基が見られる程度で、いずれも埴輪に構築された比較的小形のものである。こうしてみた場合、本遺跡のSK02も含めて当該期の出雲地方においては中心主体として採用されるのは木棺であり、箱式石棺ないし石蓋土壙墓は付隨的もしくは小児用の埋葬施設としてのみ採用されていたものと想定され、四隅突出型埴輪墓の中心主体部として箱式石棺が採用される石見山間部・広島県北部とは際立った違いをみせる。

出雲地方で中心主体として箱式石棺が採用されるのは古墳時代前期からで、八幡山古墳⁽²⁹⁾、奥才14号墳⁽³⁰⁾、古佐山根1号墳⁽³¹⁾などがあり、いずれも比較的小形の円・方墳である。これらは一見在地性の強い墓制といった印象を受けるが、先にみたように弥生時代の様相とは大きな断絶が認められる。このように当地域の古墳時代前期の箱式石棺は、当地域が古墳時代社会に組み込まれていく過程の中で畿内を中心とした他地域からの影響を受けて新たに一定の階層・序列を表象する埋葬主体として採用されるようになった可能性も想定され、今後の検討課題といえる。

3・SK01の供献土器群について

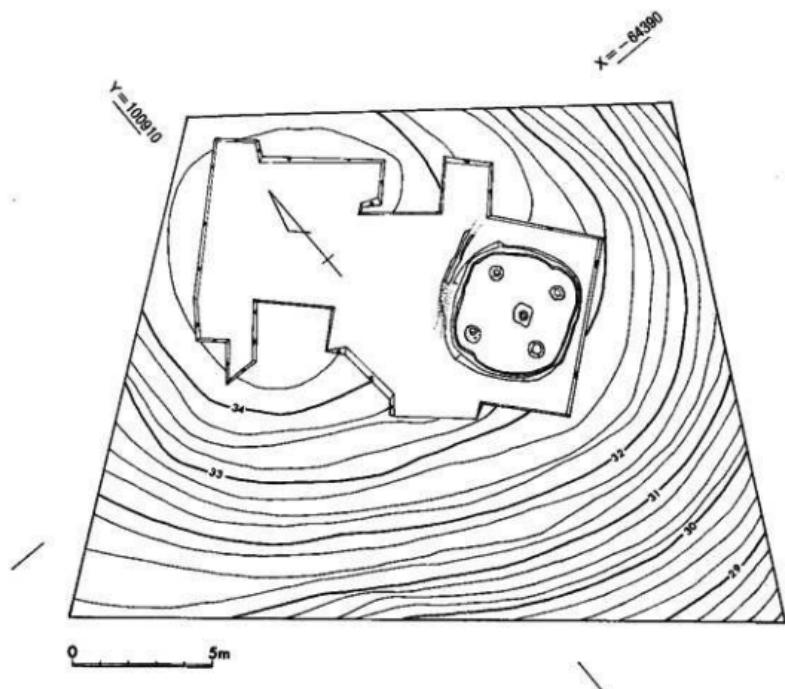
今回の調査でSK01で検出した上器群はかなり細片化しており全体を窺える資料は少ないが、單一埋葬に伴う一括性の高い土器群である。その位置付けについて考えた場合、壺の口縁部外面から擬回線文が消失し、ややカーブを描いて外反し端部が先細り状になる点、口縁部屈曲部があまり突出せず、やや斜め下方向を指向している点などは従来の鏡尾A-5号墓式に共通する特徴であると言える。ただ鏡尾A-5号墓の資料の中には口縁部が直線的に立ち上がるものが含まれる点、丸底化が進行している点などからみて、SK01の土器群はこれよりやや古相の様相をもち、草田編年の4期前後に位置付けらるものと思われる。SK01上器群には高杯が一定の器種構成を占め、また棱をもって外反する出雲地方ではあまり類例の無い高杯を含む点など、当該期の他の供献土器群とはやや異なる印象を受ける。このように今回検出したSK01土器群は当地域の土器編年や器種構成を知るうえで貴重な資料を提供したといえる。

第6章 猫ノ谷遺跡

第1節 調査の概要

猫ノ谷遺跡は安来市黒井田町細井の山頂（標高34m）に位置する。佐久保地区と細井地区との境界にあって、他の尾根と統一してはいるもののやや独立した感があり、山下の峠道や周囲の山々に対する眺望には日を見はるものがある。現状は雑木林と檜の植林地であった。

安来道路建設に伴う中国電力送電線鉄塔の移設予定地となつことにより、平成5年4月1日から同年5月31日にわたって、山頂とその周囲326m²を調査した。



第52図 猫ノ谷遺跡遺構位置図 S=1/200

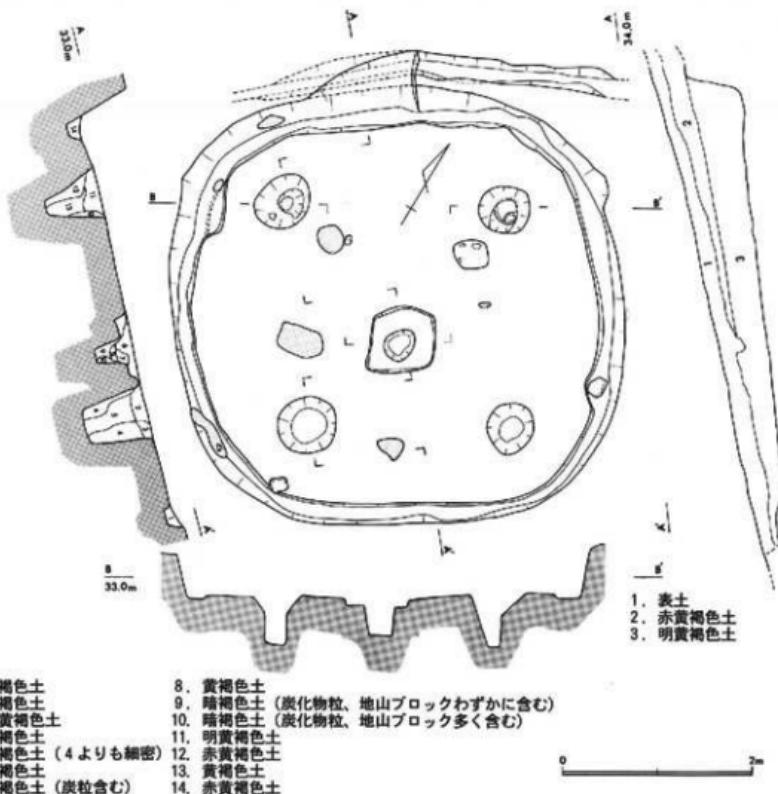
第2節 検出した遺構・遺物

竪穴住居跡

検出した遺構は竪穴住居跡1棟のみであった。山頂平坦面の南東側で、表土下20~30cmで竪穴上面の平面プランを確認した。床面までは15~60cmの明黄褐色土に覆われており、整然とした隅丸方形の住居跡が壁溝も含めて完全な形で残されていた。

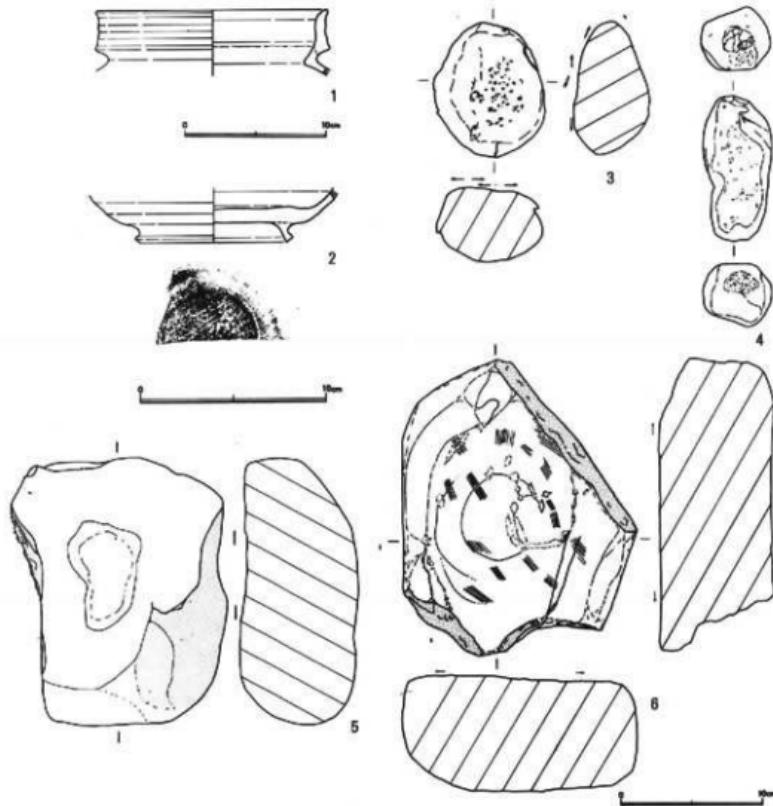
この住居跡が掘り込まれている土質は、極めて加工の容易な柔弱なものであった。また、竪穴掘り込みの上端は地形と同様に南東に傾斜している。

遺構の規模は壁溝を含めた長幅4.8m、短幅4.6mを測る。壁溝は幅15~20cm、深さ10cmを測る。



第53図 猫ノ谷遺跡竪穴住居跡実測図 S=1/60

床面には直径50~60cm、深さ50~70cmの柱穴が2.2~2.4mの間隔で四隅に配されていた。また、床面の中心からやや南東側にずれて、炉跡とみられる二段に掘り込まれたピットを検出した。上段は縦横70cmで、4cmほど掘り込まれておりほぼ正方形、下段は上段の中央に直径35cm、深さ30cmを測る平面円形のものであった。このピットには木炭粒や炭化物が多量に詰まっており、土層の堆積状況も柱穴とは異なっていた。このほか、床面に20cm×30cmを測るもの2ヶ所、30cm×50cmを測るもの1ヶ所、計3ヶ所の焼土面を検出した。また、壁溝にも角張った小さな焼石と幅10cm、長さ65cmを測る焼土面を検出した。さらに、壁溝の埋土中に若干焼土が溜まっている部分も検出した。これらの焼土面は住居跡の西側半分の区域内にある。



第54図 猫ノ谷遺跡出土遺物 弥生土器、石器 S=1/4、須恵器 S=1/3

遺物

遺構に伴う遺物は、床面や壁溝から出土した2つの台石と、それらとセットで使用されていたと思われる叩石2つである。台石はどちらも人頭大で、もともと平たく、座りのよい原石を選んで加工調整したと考えられる。5は淡い緑色で、長辺最大19cm、短辺最大15cm、厚さ7.5cmを測る。平面的にはやや不整形な形状を呈している。使用面は、他の部分に比べて削ぎ落としたように扁平に加工されている。中央がくぼんでおり、叩石による敲打痕や擦痕、また、その時に生じたと思われる石を構成する鉱物の剥離痕もこの部分に集中している。また、割れて欠損している部分があり、造構からも周辺からも接合可能な石片は検出されなかった。この割れた面は、採取加工段階のものにしては凹凸が甚だしく、また、廃棄後のものにしてはこなれている。使用痕の集中している範囲を勘案すれば、使用中に割れたものをそのまま使用し続けたとみるのが妥当であろう。なお、この台石は、床面よりやや高い位置から裏返しの状態で出土しており、廃棄後に原位置から動かされた可能性が高い。

6は乳灰白色で、長辺最大21.1cm、短辺最大17cm、厚さ8.3cmを測る。加工調整は、やはり、使用面を偏方に研磨し、それ以外の部分についても丁寧に研磨して仕上げている。この点5の台石とは際だった違いを見せている。また、使用痕やその際の剥離痕などが使用面のほぼ全域に及んでいる。擦痕が巡り、観察可能なものだけで周囲に及ぶわずかな円形のくぼみがみられる。これらは磨石を梢円運動によって繰り返し使用したことを示していると思われる。6にも欠損した部分があるが、5と同様に、使用中に割れたものをそのまま使用し続けたものと考えられる。出土状況については、5とは違って、壁溝と床面の境界から床面とほぼ同じレベルで出土しており、重量から考えても原位置を保っている可能性がある。

3は叩石と思われる。淡い灰色で、平面は梢円形を呈しており、使用面の裏側は、大きさ、ふくらみ具合とも大人の手になじみやすい。長径9.7cm、短径8cm、厚さ5.2cmを測る。使用面はほぼ全面にわたって敲打による剥離痕が見られる。

4は磨石と叩石の両方として使われていたと思われる。これも大人の手によく馴染む形状をしている。灰茶褐色で四角柱状を呈しており、長辺の角を研磨して加工調整している。長さ10.3cm、最大幅4.9cmを測る。両端とも摩滅した面の切り合いがある。また、側面のうち1面だけ敲打痕の集中している面がある。これら4点は、主に3と5、4と6の組合せで使用されていたと考えられる。このほかに、造構の周囲や、埋土中から上器小片が2点出土した。

1は壺形土器の口縁である。風化が激しく、調整や施文などについては観察に堪えないが、複合口縁の形状、頸部の屈曲の様子は、出雲・隱岐弥生土器編年V-3様式のものに類似がみられる。^(註)この土器は住居跡の掘り込み近くの地山面から出土した。

2は須恵器环身の底部片である。内面は回転ナデの後ナデで調整している。底部外面は静止糸切りの跡が残っており、中心部の凹凸をナデで調整している。2筋の交差するヘラ記号が明瞭に残っている。底部の器壁は厚く、立ち上がりは丸みを帯びて斜め上方に伸びている。貼り付けた高台は薄めでやや高く、外反する。高廣編年ⅢB期（7世紀末～8世紀初）のものに類例がみられる。この須恵器は遺構を覆っていた表土の直下から出土したもので、住居とは直接関係ないものと考える。

第3節 小 結

本遺跡では調査面積と立地上の制限から、遺構としては堅穴住居跡1棟を検出したにとどまった。また、遺構に伴う遺物として、土器は出土しておらず、遺物から住居が営まれていた時期を特定することについては困難なものがある。しかし、近年、集落跡の調査例が増大する中で、山陰地方における堅穴住居跡の平面形の変遷については、ほぼ明らかにされつつある。⁽³⁷⁾これらの成果からみれば、本遺跡の堅穴住居跡の時期は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に比定することができると思われる。

本遺跡を含めて、この周辺では、大原遺跡、臼クリ遺跡、岩屋口遺跡、越前遺跡、普請場遺跡などで時期（弥生時代後期後半～古墳時代初頭）や立地（尾根上、丘陵上）をほぼ同じくする住居跡が検出されている。なぜこのような時期にこのような立地に住居を営む必要があったのかということについては疑問の残るところである。本遺跡の堅穴住居跡もこれら遺跡の住居跡との連携、関連のなかで捉えていかなければならないと考える。

註

- (1) 当遺跡の砂礫層に関する地質学的性質については島根大学准教授水城研究センターの徳岡隆夫教授に御教示いただいた。
- (2) 須原町教育委員会「五明田遺跡」1991年
- (3) 千葉 豊「西日本縄文後期土器の二三の問題」「古代古墳」第14集 1992年
- (4) 柳浦俊一「石台遺跡出土の繩文時代資料(1)」「八重立つ原土記の丘 No.121」 1993年
- (5) 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター「永井遺跡」(「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」第9冊) 1990年
- (6) 平成5年度に鳥根県教育委員会が調査を実施し、前期～晚期初頭の土器が約2,500点出土している。
- (7) 大森隆雄「安来・能義地域の繩文時代遺跡」「季刊文化財」第53号 1985年
- (8) 当地域の弥生後期土器の編年については、以下のものを参考とした。
- 藤田憲司「山陰(鍾山式)の再検討とその併行関係」「考古学雑誌」第64巻第4号 1979年
房宗寿雄「山陰地域における古墳形成期の様相」「島根考古学会誌」第1集 1984年
赤沢秀則「山陰地方古墳出現前後の土器編年試案」「松江考古」第6号 1985年
花谷めぐみ「山陰古式土師器の形式学的研究—鳥根県内の資料を中心にして—」「島根考古学会誌」第4集 1987年
松本岩雄「7出雲・羅岐地域」「弥生土器の様式と編年」山陰・山陽編一 1992年
- (9) 鹿島町教育委員会「南講武草田遺跡 講武地区(県営)開拓整備事業発掘調査報告書5」 1992年
- (10) 註(8)と同じ
- (11) 島根県教育委員会「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書IV—鳥根県松江市山代町所在四丁寺跡—」 1985年
- (12) 浜田市教育委員会「石見國分寺跡第I期調査概報 昭和60年度～昭和63年度」 1989年
- (13) 鳥根県教育委員会「才ノ岬遺跡」「西道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV」 1983年
- (14) 註(8)と同じ
- (15) 鳥根県横田町の絲原記念館の小便生産を示す写真パネルのなかによく似た例がみられる。
- (16) 山本 清「山陰の須恵器」「山陰古墳文化の研究」 1971年所収
- (17) 田辺昭三「陶邑古窯址群」 I 平安学園考古学クラブ 1966年
- (18) 鳥根県教育委員会「鳥根県生産遺跡分布調査報告書III 窯業関係遺跡」 1985年
- (19) 註(18)と同じ
- (20) 近藤 正ほか「鳥根県安来平野における土壌墓」「上代文化」36 1961年
- (21) 安来市教育委員会「長善土壌墓群」 1981年
- (22) 註20と同じ
- (23) 福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」「考古学研究」第32巻第1号 1985年
- (24) 鳥取県においては鳥取市布勢町指奥墳墓群や倉吉市阿弥大寺墳墓群などで小口穴をもつI型木棺が普遍的に検出されている。
- (25) 内田 才編「鳥根県安来市九重町中山遺跡調査報告書」 1968年
- (26) 甲元真之「弥生時代の社会」「古代史発掘」4 講談社 1975年
- (27) 出雲考古学研究会「荒島墳墓群」 1985年
- (28) 石見山間部では瑞穂町朝庵原1号墓、広島県北部では戦ノ神3・4号墓がある。
- (29) 内田 才「(2) 前期古墳文化」「安来市誌」 1970年
- (30) 鹿島町教育委員会「奥才古墳群」 1985年
- (31) 平成5年度に鳥根県教育委員会が調査を実施した。年代については鎌田謙志氏の御教示による。
- (32) 北部九州では埋葬形態の選択基準に被葬者の階層や序列の位置を与える目的があり、箱式石棺はやランクの下がる古墳の主体部として秩序付けられていたことが明らかにされている。
- 吉留秀敏「北部九州の前期古墳と埋葬主体」「考古学研究」第36巻第4号 1990年
- (33) 註(8)と同じ
- (34) 註(9)と同じ
- (35) 註(8)の松本論文と同じ
- (36) 鳥根県教育委員会「高庄遺跡発掘調査報告書・和田田地造成に伴う発掘調査」 1984年
- (37) 青木遺跡発掘調査団「青木遺跡発掘調査報告書」Ⅲ 1978年

図 版

図版1 (明子谷遺跡)

空からみた
明子谷遺跡



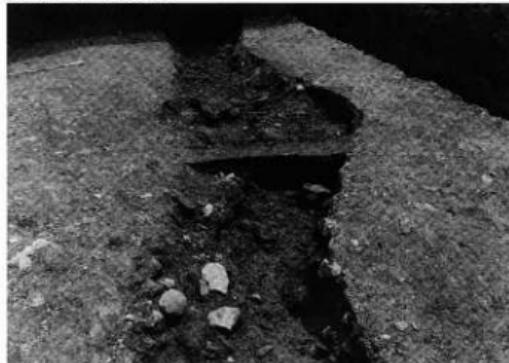
明子谷遺跡
東・南壁セクション
(北から)



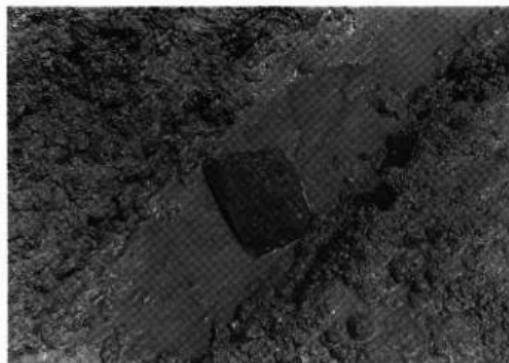
明子谷遺跡
中央ベルトセクション
(北から)



図版2 (明子谷遺跡)



明子谷遺跡
SD01



明子谷遺跡
縄文土器出土状況



明子谷遺跡
調査終了時全景

図版3 (島田黒谷Ⅱ遺跡・島田黒谷Ⅲ遺跡)

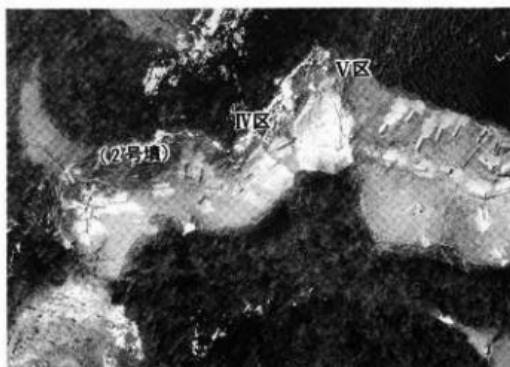
島田黒谷Ⅱ遺跡
調査風景



島田黒谷Ⅲ遺跡
I・II・III区全景



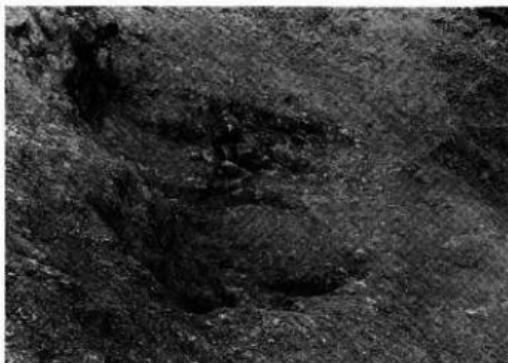
島田黒谷Ⅲ遺跡
IV・V区全景



図版 4 (島田黒谷Ⅲ遺跡)



島田黒谷Ⅲ遺跡
I区完掘状況



島田黒谷Ⅲ遺跡
II区SX01完掘状況



島田黒谷Ⅲ遺跡
II区SK01完掘状況

図版5 (島田黒谷Ⅲ遺跡)

島田黒谷Ⅲ遺跡
II区尾根上
ピット群完掘状況



島田黒谷Ⅲ遺跡
II区尾根上SX02
積石露出状況



島田黒谷Ⅲ遺跡
II区完掘状況



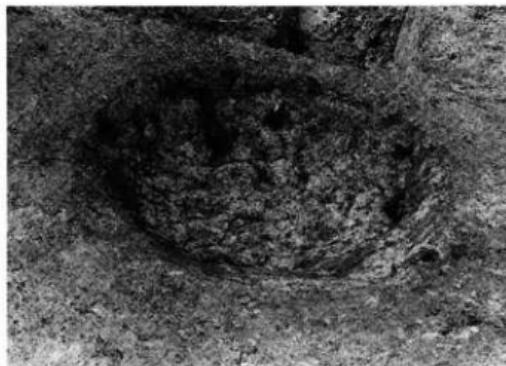
図版 6 (島田黒谷Ⅲ遺跡)



島田黒谷Ⅲ遺跡
Ⅲ区SK01完掘時



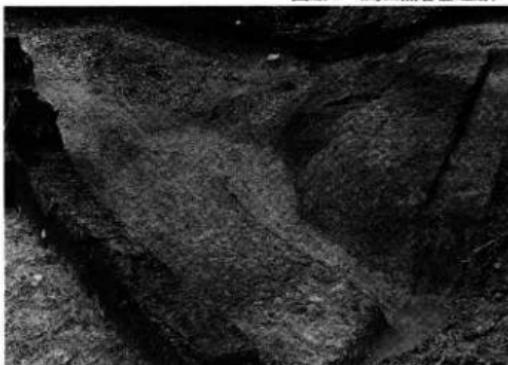
同セクション



島田黒谷Ⅲ遺跡
Ⅲ区SK03完掘時

図版 7 (島田黒谷Ⅲ遺跡)

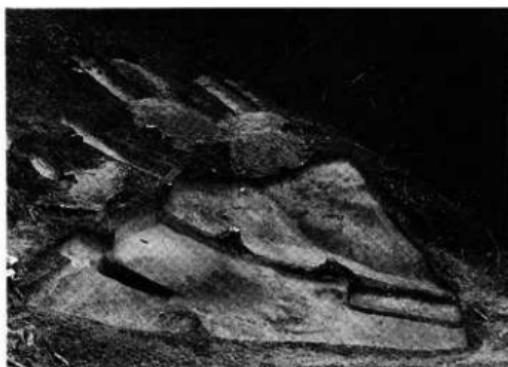
島田黒谷Ⅲ遺跡
Ⅲ区SD01



島田黒谷Ⅲ遺跡
Ⅲ区中央ベルト
セクション



島田黒谷Ⅲ遺跡
Ⅲ区全景
(北から)



図版 8 (島田黒谷Ⅲ遺跡)



島田黒谷Ⅲ遺跡
IV・V区調査前
(北から)



島田黒谷Ⅲ遺跡
IV区全景
(東から)



同東壁セクション
(西から)

図版9 (島田黒谷Ⅲ遺跡)

島田黒谷Ⅲ遺跡
IV区東西セクション
(北東から)



IV区P1完掘状況



IV区須恵器
出土状況



図版10 (島田黒谷Ⅲ遺跡)



島田黒谷Ⅲ遺跡
V区墳墓群
(SK01~04)
プラン検出時
(東から)



同完掘時
(東から)



V区SK01
供献土器検出時
(東から)

図版11 (島田黒谷Ⅲ遺跡)

島田黒谷Ⅲ遺跡
V区SK01
縦断セクション東側
(北から)



同横断セクション
(西から)



V区SK01完掘時
(西から)



図版12 (島田黒谷Ⅲ遺跡)



島田黒谷Ⅲ遺跡
V区SK02検出時
(東から)



同完掘時
(東から)



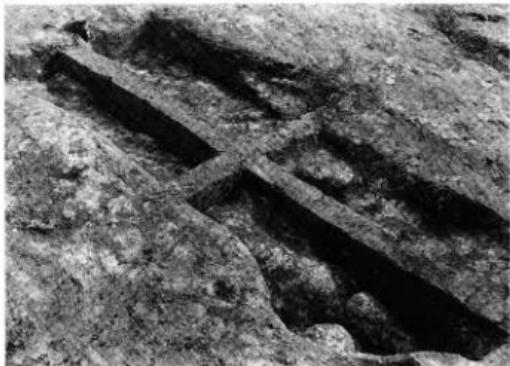
同セクション
(東から)

図版13 (島田黒谷Ⅲ遺跡)

島田黒谷Ⅲ遺跡
V区SK03
(西から)



同セクション
(北西から)



V区SK04
(北から)



図版14 (島田黒谷Ⅲ遺跡)



島田黒谷Ⅲ遺跡
V区SK04横断セクション
(南から)



同管玉出土状況

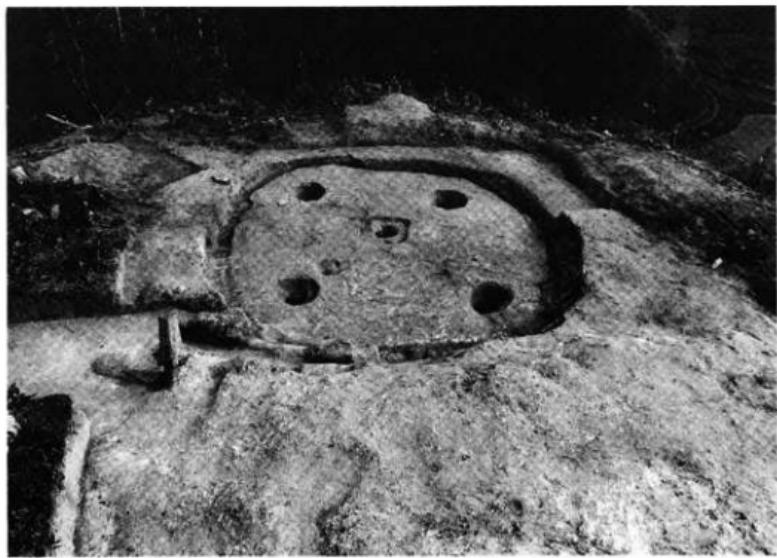


IV・V区遠景
(西から)

図版15（猫ノ谷遺跡）

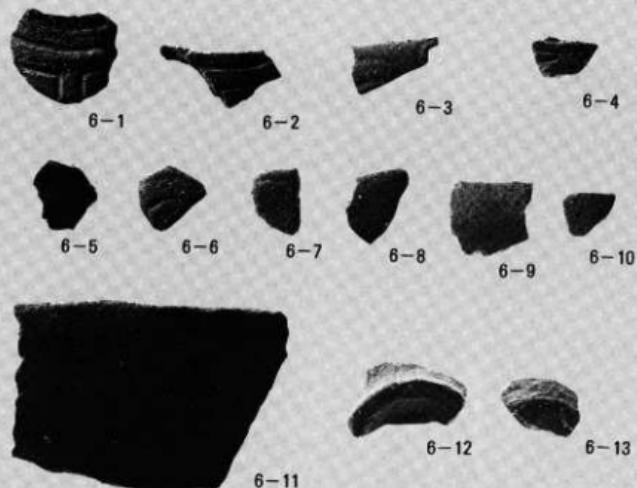


猫ノ谷遺跡調査区遠景

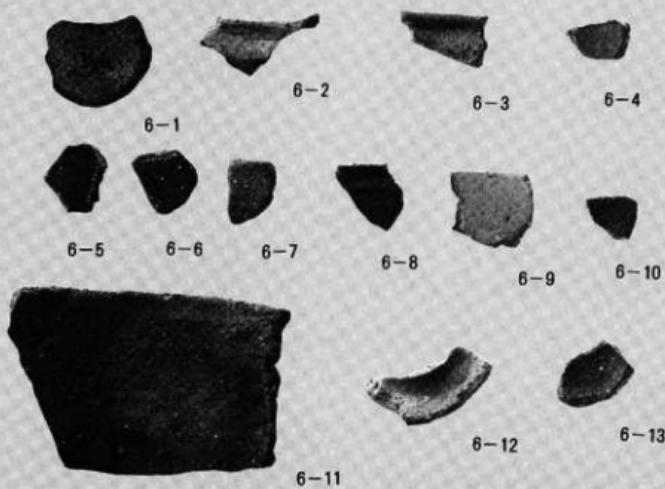


猫ノ谷遺跡竪穴式住居跡（西から）

図版16 (明子谷遺跡)

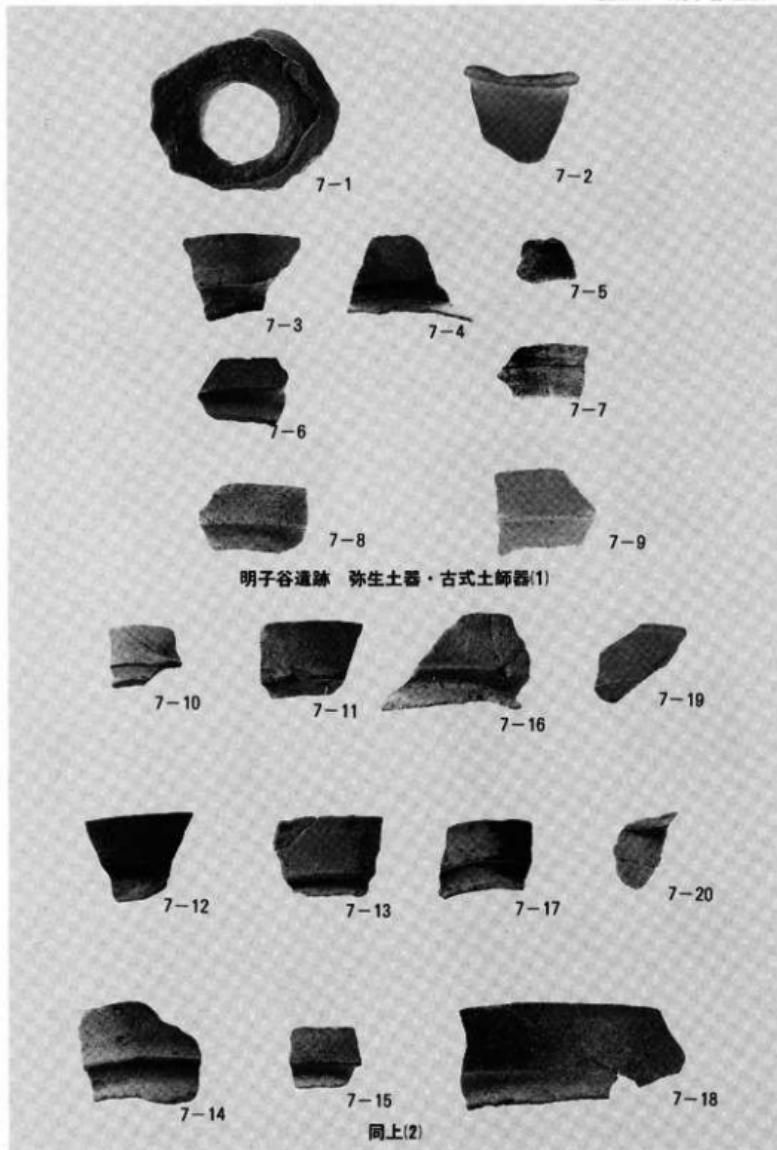


明子谷遺跡出土縄文土器（外面）

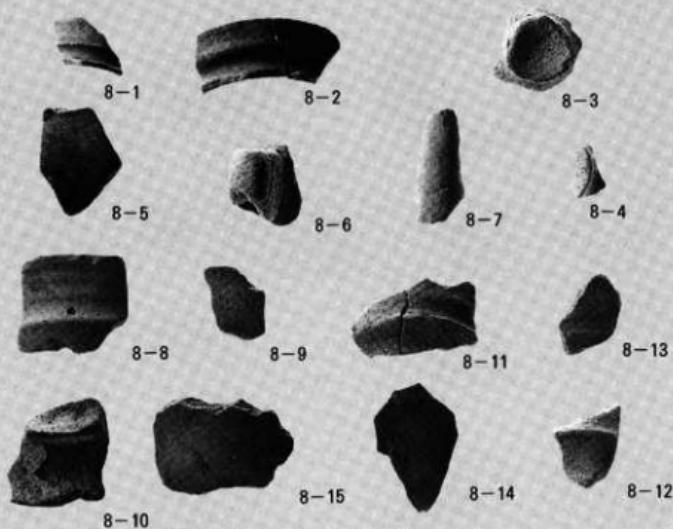


同上（内面）

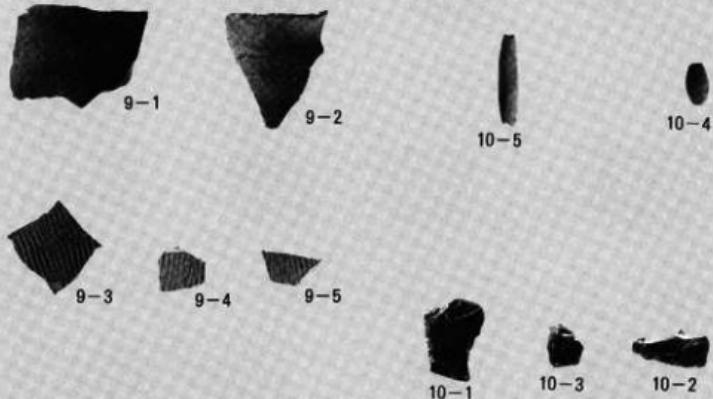
図版17 (明子谷遺跡)



図版18 (明子谷遺跡)



明子谷遺跡　弥生土器・古式土師器(3)



明子谷遺跡出土　土師器・須恵器

明子谷遺跡出土　石器・土鍤

図版19 (島田黒谷Ⅱ遺跡・Ⅲ遺跡)

13-3

13-4

13-1

13-2

島田黒谷Ⅱ遺跡出土遺物



19-4



19-3



19-6



19-5



19-2

島田黒谷Ⅲ遺跡Ⅰ区出土遺物

19-1



19-2



19-3

同上

図版20 (島田黒谷Ⅲ遺跡)



島田黒谷Ⅲ遺跡
II区出土遺物

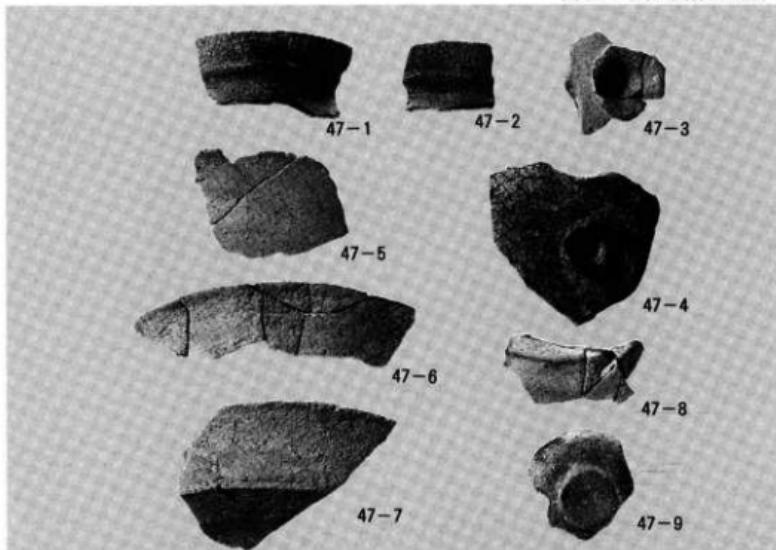


同上

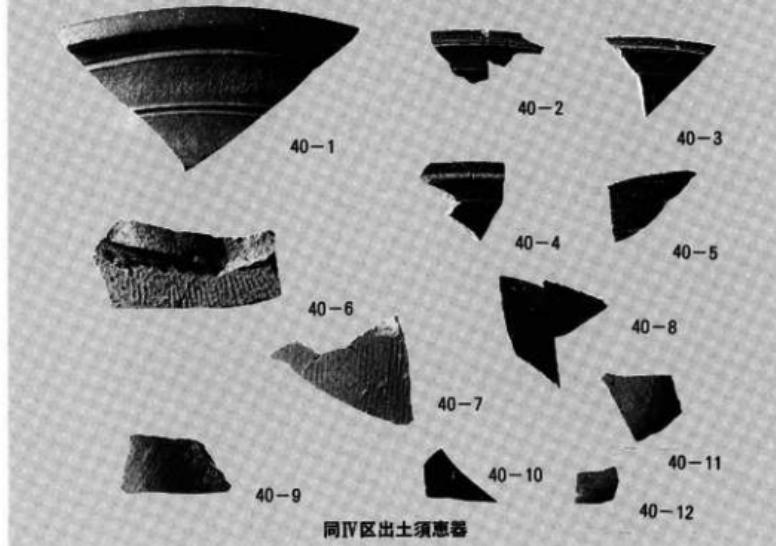
島田黒谷Ⅲ遺跡
III区出土遺物



図版21 (島田黒谷Ⅲ遺跡)

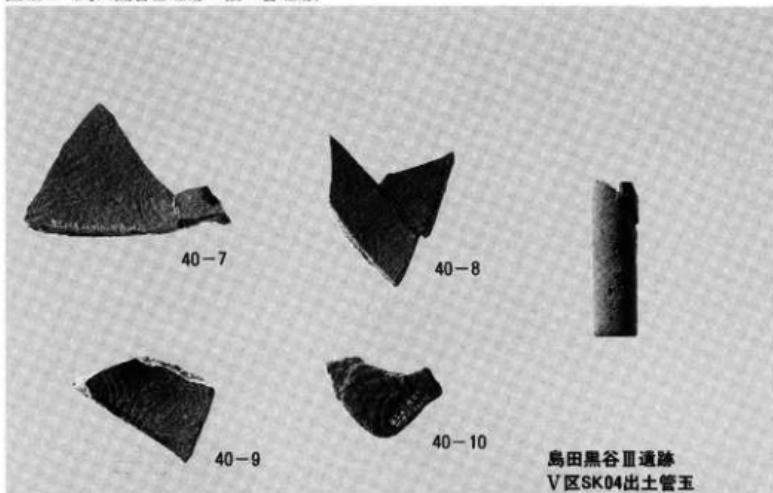


島田黒谷Ⅲ遺跡V区SK01出土弥生土器



同IV区出土須恵器

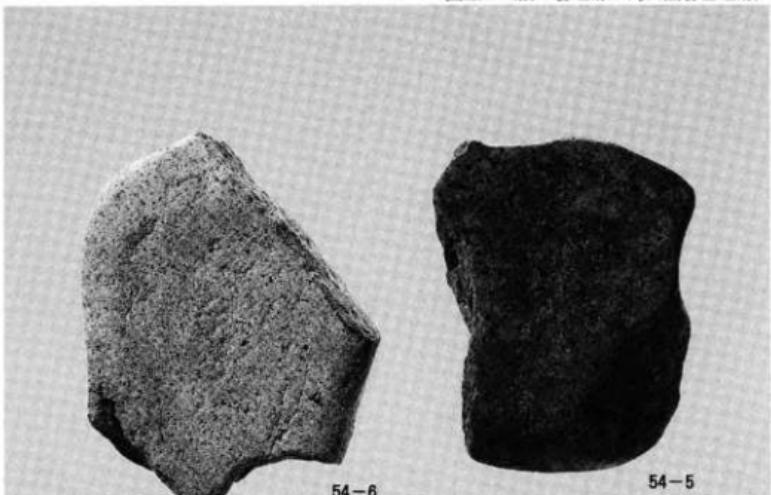
図版22 (島田黒谷Ⅲ遺跡・猪ノ谷遺跡)



島田黒谷Ⅲ遺跡IV区出土須恵器甕 (内面)



図版23 (猫ノ谷遺跡・島田黒谷Ⅲ遺跡)



猫ノ谷遺跡整穴式住居跡出土遺物(2)



島田黒谷Ⅲ遺跡V区調査風景

平成6年（1994）年3月印刷
平成6年（1994）年3月発行

明子谷遺跡・島田黒谷Ⅱ遺跡
島田黒谷Ⅲ遺跡・猫ノ谷遺跡
一般国道9号（安来道路）建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書VI

発行 建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会
印刷 松陽印刷